

文部科学省委託調査研究事業

平成28年度

総合的な教師力向上のための調査研究事業

報告書

特定非営利活動法人 TOSS

本報告書は、文部科学省の初等中等教育振興事業委託費による委託事業として、特定非営利活動法人 TOSS が実施した、平成 28 年度「総合的な教師力向上のための調査研究事業」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

目次

はじめに.....	4
第1章 事業の概要.....	5
1. 実施テーマ.....	5
2. 実施体制.....	5
3. 課題認識.....	5
4. 現状の取組.....	5
5. 調査研究の目的.....	6
6. 調査研究の具体的な内容・取組方法.....	6
7. 研究の限界.....	7
第2章 若手教員の授業力構成要素の抽出.....	8
1. 先行研究と妥当性の検討.....	8
2. 授業力構成要素の仮説.....	11
第3章 若手教員の授業力向上手法の研究.....	28
1. 基本的な授業力を検定するセミナーの実施.....	28
1-1. 教師力向上セミナーin 東京（東京都江東区教育委員会後援）.....	28
1-2. 教師力向上セミナーin 沖縄（後援多数）.....	34
1-3. 教師力向上セミナーin 三重（三重県教育委員会後援）.....	38
2. 評価の実例.....	41
3. Web サイトの作成.....	42
第4章 アンケート調査による効果検証（子どもの発達科学研究所）.....	44
第5章 総括.....	50

はじめに

特定非営利活動法人 TOSS（以下、「TOSS」）は、授業・教育にすぐに役立つ教育技術・指導法を開発し、集め、互いに追試し、検討しあって自らの授業技術を高め、そのような技術や方法を全国の教師の共有財産にしようと努める教師の研究団体として活動が続けてきた。向山洋一が 1983 年に立ち上げた「教育技術の法則化運動」がその前身となっている。優れた教師が授業の技術を自分だけの「名人芸」にするのではなく、そして困っている教師が一人だけで苦しむのではなく、それぞれが持っている教育技術・方法を情報交換し、全国の教師の共有財産にしていくことを願い、数多くの教師がこの運動に参加してきた。

発足当初から次の 4 つの理念を掲げている。

- ① 教育技術はさまざまである。できるだけ多くの方法を取りあげる。（多様性の原理）
- ② 完成された教育技術は存在しない。常に検討・修正の対象とされる。（連続性の原理）
- ③ 主張は教材・発問・指示・留意点・結果を明示した記録を根拠とする。（実証性の原理）
- ④ 多くの技術から、自分の学級に適した方法を選択するのは教師自身である。（主体性の原理）

2000 年に TOSS (Teachers' Organization of Skill Sharing) と名前を変えて再出発したが、この 4 つの理念は受け継がれている。

そうした授業技術が重要であることはもちろん、子供との空間をより活性化させるスキルの側面もまた重要である。TOSS では、初任教員からベテランまで、どのように授業の技量を高めればよいかという指標としての「TOSS 授業技量検定」を実施してきた。これまでにのべ 4603 名の教師が受検している。ただ、論文などで共有できる授業技術とは違い、授業技量の指標には曖昧な点も多いことは否定できない。

こうした状況を踏まえて、TOSS では、平成 28 年度文部科学省の「総合的な教師力向上のための調査研究事業」の実施団体として、「若手教員の授業力構成要素の抽出とその向上手法の研究」の研究課題のもとで、当該調査事業を実施し、その課題と対策についての検討を行った。

第 1 章では、本事業の概要を述べ、その目的と方法を明らかにした。第 2 章では、本事業の研究テーマである若手教員の授業力構成要素について、その項目を抽出するためにどのような検討をしたかを述べた。第 3 章では、その指標に基づいて実施した 3 回のセミナーの概要を報告し、参加者のアンケートや指標による評価の実例などを載せた。第 4 章では、子どもの発達科学研究所に依頼して実施した Web アンケートの統計的な解析結果とそれによって明らかになった本研究の価値を述べた。

第1章 事業の概要

1. 実施テーマ

若手教員の授業力構成要素の抽出とその向上手法の研究

2. 実施体制

職名	名	役割分担
NPO TOSS 理事長	向山洋一	全体総括
玉川大学・教授	谷 和樹	実施にあたっての全体の事務
NPO TOSS 事務局長	水川勝利	会計
(株) 騒人社・社長	師尾喜代子	テキスト作成
真岡市立真岡東小学校	松崎 力	セミナー運営

3. 課題認識

授業の中での子供の問題行動にうまく対応できず学級が荒れていくケースがある。原因は様々あるが、主要なものの一つに「教師の授業力」を上げることができる。子供を熱中させる授業、引き付ける授業、できない子ができるようになる授業等を実現する力量のある教師の学級は荒れることが少ない。しかし現在の教員養成の中では、このような授業力を向上させることのできるシステムは、ほとんど確立されていない。

教師のこのような授業力を構成する要素を探り、それを向上させるための具体的なトレーニング方法を確立することが急務である。

4. 現状の取組

大学や大学院では教師の授業技量の向上させるために模擬授業を実施し、教授が見本としての授業を実施してみせるような取組はほとんど実施されていない。

TOSSは、授業・教育にすぐに役立つ教育技術・指導法を開発し、集め、互いに追試し、検討しあって自らの授業技術を高め、そのような技術や方法を全国の教師の共有財産にしようと努める教師の研究団体である。

TOSSでは子供への適切な指導方法や学級経営術を学ぶための講習会を毎年実施している。例えば、2月より行われる全国1000会場教え方セミナーでは、2016年度の参加者は26000人であり、13年間で30万人が参加している。8月に行われるサマーセミナーでは、例年1000名の教師が参加をし、子供への指導方法や学級経営術を学んでいる。

また、授業における明確な「教師の技量」の目安を示し、教師が子供役の教師相手に模擬授業をし、それを腕のある教師が審査をする「TOSS 授業技量検定」を独自に実施している。これまでにのべ4603名が受検をしている。そのほとんどがリピーターとして繰り返し受検する傾向がある。

TOSS 授業技量検定を受検することで、授業力向上の一助になることを本人が実感しているからであらう。

5. 調査研究の目的

授業の中での子供の問題行動にうまく対応できず学級が荒れていくケースがある。原因は様々あるが、主要なものの一つは教師の授業技量である。子供を熱中させる授業、ひき付ける授業、できない子ができるようになる授業、等々を実現する力量のある教師の学級は荒れることが少ない。平成 27 年 12 月の中央教育審議会の答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」においても教員育成指標の策定が謳われている。とりわけ 1～数年目の教職の基盤を固める時期において、どのような資質や能力を身につけるべきなのかを教員は必ずしも明確に意識していないことが多い。各学校種や各地域の実情によって異なることは当然だが、ごく基本的な授業力に関しては非常に具体的な要素が共通して存在するということも想定される。教師のこのような授業力を構成する要素を探り、それを向上させるための具体的なトレーニング方法を確立することが急務である。本調査研究では、こうした授業力構成要素についての仮説を設定し、模擬授業検定等を通してその効果を検証することを目的とする。

6. 調査研究の具体的な内容・取組方法

1. 教員の基本的な授業力を構成する要素を抽出する。

(1)例えば次のような諸点が想定される。

①あたたかな表情、②子供へのアイコンタクト、③クリアで明るい声、④心地よいリズムとテンポ、⑤教師の立ち位置や動線、⑥子供への対応・応答、⑦明確な発問と指示、⑧授業開始局面での流し方、⑨余分な言葉の削除、⑩授業の組み立て、⑪その他・・・

(2)先行研究からこうした内容の妥当性を検討する。

(3)カテゴライズして基本的授業力構成要素の指標を仮説として作成する。

2. 参考テキストと動画を作成する。

(1)それぞれの指標を教員が自分で学び、トレーニングするための簡易なテキストを開発する。

(2)下記セミナー開催時にベテラン教員による実演の動画を撮影する。

(3)テキスト、動画とも電子媒体で提供する。

(4)Web からダウンロードできるようにする。

3. 基本的な授業力を検定するセミナーを実施する。

(1)参加者に模擬授業を実演してもらう。

(2)あらかじめ設定した各構成要素にしたがって得点化する。

(3)評定にあたってはベテラン教員複数による観察やビデオ撮影による検証など、可能な限り客観性を保つようにする。

4. 指標の効果を検証するためのアンケート調査を実施する。

(1)セミナー受講者を対象とし、事前と事後にアンケート調査を実施する。

(2)アンケートのアドバイザーとして専門家を依頼する。

(3) アンケートを分析し、指標の修正、及びセミナーの組立について検討する。

7. 研究の限界

このような勉強会（セミナー）に参加する教師の多くはもともと学ぼうとする意欲が高い。学ぶ意欲が強い上に、休日を返上して参加している。「授業の腕を上げたい」という意識は、より強く働くだらう。そうしたバイアスによって、効果検証ではいい結果が出やすくなる可能性がある。

そうした面では、アンケート等によって、測定しようと意図しているものを正確に測定できるかどうかは難しい点もあると言わざるを得ない。

そうした中で **fidelity** を可能な限り高めるために、子どもの発達科学研究所の統計の専門家に解析を依頼し、交絡因子等をできるだけ除去するよう努めた。

第2章 若手教員の授業力構成要素の抽出

1. 先行研究と妥当性の検討

1-1. 教師要因

2008年11月21日に発刊された the Times Educational Supplement では、『Visible Learning』(John Hattie (2008)) を「teaching's holy grail (教育の聖杯)」と称した。楽観的で、曖昧な教育論文の多い中、この『Visible Learning』(可視化された学習) は、教育における要素を極めて明確に数値化している。

『Visible Learning』では、学習者（ここでは子供を指す）の学力が影響を及ぼす要因の効果の大きさを解明するために行ったメタ分析で、次のような効果の数値が表れている。(d の値が高いほど、学習者に対する効果が高い。)

学校的な学習の最重要規定に関する平均効果

要因群	メタ分析数	研究サンプル数	学習者数	効果の数	d
学習者	139	11101	7513406	38287	0.40
家庭	36	2211	11672658	5182	0.31
学校	101	4150	4416898	13348	0.23
教師	31	2225	402325	5559	0.49
学習指導要領	144	7102	6899428	29220	0.45
授業	365	25860	52128719	55143	0.42
合計	816	52649	83033433	146626	—
平均	—	—	—	—	—0.40

(Ewald Terhart 著 原田信之訳『John Hattie (Jhon Hattie) の「可視化された学習」への評価』(2014) 名古屋市立大学院人間文化研究科『人間文化研究』21号)

重要なのは、要因群において効果が大きかったのが 0.49 ポイントの「教師」だということである。つまり Hattie によると、学習指導要領（指導計画）や授業の内容よりも大きな影響を与えるのは、教師自身の要素である。このことから、若手教員の授業力構成要素として、教材の構成能力や教育編成能力等ではなく、教師の具体的な授業行為そのものを基本的な授業技量として位置づける。

教師の授業技量の最も基本的な概念として、教師と子供との空間的関係性 (Immediacy) を分析する研究がある。『Immediacy in the Classroom: Research and Practical Implications』(Kelly A. Rocca (2007)) では「教師の授業力は概ね以下の 9 つである」とされる。

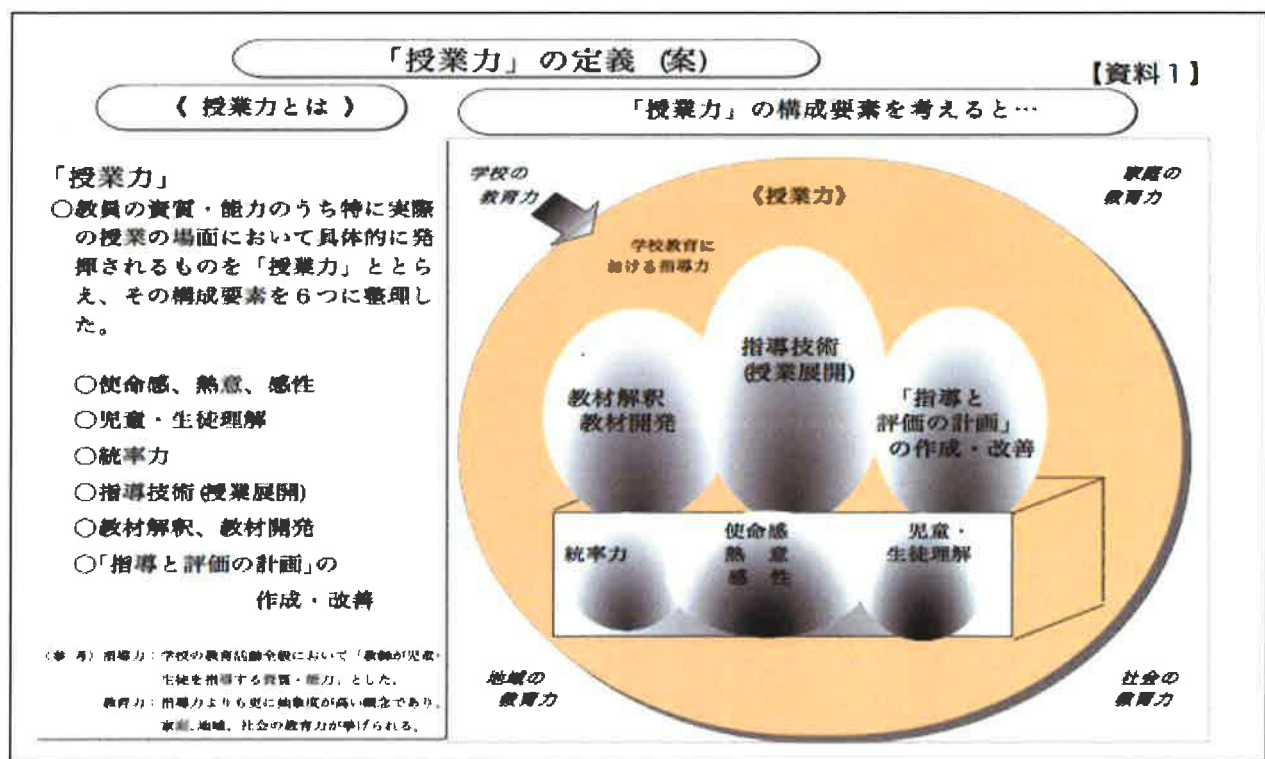
1 Gestures



- 2 Vocal Variety
- 3 Smiling at students
- 4 Relaxed body posture
- 5 Moving around classroom
- 6 Speaking with outline only
- 7 Removal of barriers
- 8 Appropriate touch
- 9 Professional casual dress

※番号は便宜上、著者が付した。

日本でも「教師の授業力とは何か」という先行研究は多数、行われている。
例えば東京都教育委員会は「教師の授業力」として下記のものをあげている。



(<http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/buka/shidou/jugyouryoku/shiryoku.pdf#search=%27>)

しかし、次のような問題点もある。

- 1 概念が抽象的であり、直観的に使いづらい。
- 2 「どのようにすればその力がつけられるのか？」という具体的な方策に乏しい。
- 3 「なぜその力が必要なのか？」という科学的根拠が明示されていない。

前掲書の『Immediacy in the Classroom: Research and Practical Implications』では Andersen (1979) らの論を引きながら、客観的に、科学的手法を用いて「教師の授業力」を定義している。

よって本調査では『Immediacy in the Classroom: Research and Practical Implications』を基にしつつ、さらに明確にイメージができて、個々人でも練習、習得が可能な形として「若手教員の授業力構成要素」を作成した。そしてそれらの力をつけることを狙いとした研究会（セミナー）を開催し、最終的には科学的に効果を測定し、参加者に統計的に優位差が出るのかを検証する。

1-2. 授業力構成要素を鍛える方法の検討

若手の力量を上げる教育研究は、医学界においても行われている。医者への継続職業教育の効果に関する研究の一つに、トロント大学の医師兼教育科学者であるデイブ・デービスによるものがある。

(Dave Davis, Mary Ann Thomson O' Brien, Nick Freemantle, Fredric M. Wolf, Paul Mazmanian, and Anne Taylor-Vaisey (1999) 「Impact of formal continuing medical education: Do conferences, Workshops, rounds, and other traditional continuing education activities change physician behavior or health care outcomes?」 JAMA 282, no. 9)

デービスの研究チームが実施した研究では、さまざまな教育的「介入」、すなわち講座、会議などの集会、講義、シンポジウム、医療ツアーなど医師の知識を高め、技能を改善することを目的とする様々な活動を調べた。

その結果、最も効果的な介入はロールプレイ、ディスカッション、問題解決、実地訓練など何らかのインタラクティブ（相互作用）的な要素を含むものであることがわかった。こうした活動はまだごくわずかではあるものの、実際に医師の技能と担当患者の治療効果の改善につながった。対照的に最も効果が低かったのは講義中心の介入、すなわち参加する医師らが講義を聴くだけの教育的活動だった。継続医学教育で最も多いのがこのタイプだ。受動的に講義を聴くのは、医師の技能にも担当患者の治療効果にもまったく有意な効果がないとデービスは結論付けている。

そのため我々は、授業技量の高い教師によるロールプレイング解説、つまり「介入」による研修を導入した。

自分より技量が上の人から明確な改善策が与えられる学習法の効率が良いことは、次の論文にも記載されている。

ほとんどの学生も、改善すべきところを知っていて必要な勉強法を指示してくれる教師がいたほうが、学習がはかどる。

N. Kornell & R. A. Bjork (2008) 「Optimizing self-regulated study and costs of dropping flashcard」 Memory 16

職種は違うが、チェスの能力の研究では、次のような練習の効果が報告されている。

チェスの研究結果は、さまざまな能力の発達における「才能」と練習の相互作用について重要な洞察を与えてくれる。特定の資質（チェスの研究の場合は IQ）を生まれつき持ち合わせている人は、能力を学びはじめた当初は有利かもしれないが、時間が経つにつれてその影響は小さくなり、最終的には練習の量と質がその人がどれほどの能力を獲得するかを決定するうえではるかに大きな意味をもつようになる。さまざまな分野の研究で、同じパターンが存在するエビデンスが確認されてきた。

K. Anders Ericsson (2014) 「Why expert performance is special and cannot be extrapolated from studies of performance in the general population: A response to criticisms」 Intelligence

つまり「練習の量と質」が大きくものを言う。がむしやに何でもやれば良いのではない。

長年にわたる練習によって、チェスプレーヤーは駒のパターン、すなわちそれぞれの位置だけではなく相互関係までもひと目で認識できるようになる。彼らにとって駒のパターンを馴染みの友のような存在である。ビル・チェースとハーバード・サイモンはこうしたパターンを「塊」と呼んだが、重要なのはそれが長期記憶に保持されていることだ。サイモンの推計では、チェスプレーヤーはマスターの域に達するまでに、こうした塊を5万個ほど蓄積している。

Hebert A.Simon and Kevin Gilmartin (1973)「A simulation of memory for chess positions」
Cognitive Psychology5,vo.1

ここでいう上級者とは「型」(技術)をいくつも知っていて、それを使いこなせる人だ。今回、この評価指標を用いて検定を行う人物は「経験年数が十分にあり(10年以上)、論文や単著を発表し、教育技術をいくつも知っており、大きな学会や研究会等で何度も(20回以上)授業発表したことがある教師」の中から選んだ。

2. 授業力構成要素の仮説

授業力構成要素として、10の要素を挙げた。それぞれに3つのサブインデックスを設定した。以下、それぞれについて説明する。

2-1. 【指標1】意図が明確で分かりやすい発問

教師による授業行為において基本となるものが、「発問」である。学習者は、教師による「発問」をもとに、自らの思考を深め、お互いの意見を発表し合い、学んだことをノートに記録するなどして、学習を進めていく。そのような授業の大切な起点となる「発問」が、どのようなものであるかを規定しているのが、本指標である。

発問とは、「学習指導上の必要から、学習者に対して教師から発せられる問いかけ」(『国語教育指導用語辞典(第三版)』から引用)である。発問は、子供たちに伝わらなければ、意味をなさない。本指標にある「分かりやすい」という文言は、子供が、その発問をされた場合に「分かりやすい」と感じられるかどうかということを基本としている。子供は、その発達段階において、一様ではない。授業が行われる教室において、教師の発問を聞くすべての子供が、「分かりやすい」と感じることが重要である。問は、教師による「言葉」によって行われる。時には、視覚的な情報も併せて行われることもある。いずれにしても、子供への分かりやすさを第一とするので、必要最小限度の言葉に削ることが求められる。言葉を短くすることと、授業全体を通した発問の組立を、整合性をもとに考えることが必要である。

また、発問は「学習指導上の必要」においてなされなければならない。その点において求められるのが、本指標における「意図が明確」ということである。その発問を聞く子供にとって、突拍子もない発問の連続では、授業での理解が深まらない。なぜ、そのような発問がなされているのか、教師側の意図が明確であることによって、その授業を受ける子供が、安心して自らの思考を深めていくことができる。

※各項目とも①が優先される。

①を満たした場合は②を、

①②を満たした場合は③を加えて評定する。

1. 意図が明確で分かりやすい発問

- ① 授業最初の発問が分かりやすく、活動しやすい。.....(3点)
- ② 無意図的で無駄な発問がない。.....(3点)
- ③ 複数の発問が意図を持って組み立てられている。.....(3点)

2. 明確で端的な作業指示

- ① 指示が端的で短い。.....(3点)
- ② 発問に作業指示を組み合わせて子供の活動を促している。.....(3点)
- ③ 数種類の作業指示を使い分けている。.....(3点)

3. あたたかな表情（笑顔）

- ① 授業の開始を笑顔で始めている。.....(1点)
- ② あたたかな笑顔を最後まで保持している。.....(1点)
- ③ 場面に応じて表情を豊かに使い分けている。.....(1点)

4. 適切な声の大きさとトーン

- ① 教室全体に通る声で授業をしている。.....(1点)
- ② 穏やかで温かい声のトーンで授業をしている。.....(1点)
- ③ 語尾の一語まで明晰に発音している。.....(1点)

5. 子どもへの目線（子どもと目が合う）

- ① 全体へ話す際に、教室全体に目線を配り、一人一人に目を合わせている。.....(1点)
- ② 教師が教科書などを範読するような場合でも子供たちと目線を合わせようとしている。.....(1点)
- ③ 個別対応、児童の発言の際にも、全体に目配りをしている。.....(1点)

6. 適切な立ち位置（発問時や個別対応時）

- ① 教卓の前だけに留まっていない。逆に動きすぎてもいない。.....(1点)
- ② 大切な発問の時には体を止めて子供たちに向かっている。.....(1点)
- ③ 場面に応じて子どもの席に近づくなど適切な立ち位置をとっている。.....(1点)

7. 適切な動線（机間指導時や個別対応時）

- ① 教室で子どもと教師が動きやすいように配慮している。.....(1点)
- ② 机間指導の動線にロジックがあり公平な動きをしている。.....(1点)
- ③ ノートを持ってこさせる時の子供たちの動きに配慮している。.....(1点)

8. 授業の心地よいスピード感（空白、リズムやテンポ）

- ① 活動と活動を重ねるように指示をしている。.....(1点)
- ② 作業を早く終えた後、10秒以上も待たされている子供がほとんどいない。.....(1点)
- ③ どの子も集中して作業している。.....(1点)

9. 子どもへの対応（非言語的な対応を含む）

- ① 授業中の褒め言葉が具体的で豊富である。.....(1点)
- ② 子供の予想外の発言にも「褒める」「切り返す」などの適切な言葉で対応できる。.....(1点)
- ③ 授業中に不規則な発言・行動をする子への適切な対応ができる。.....(1点)

10. 授業時間の遵守

- ① 時間通りに授業が終わる。.....(1点)
- ② 開始時刻と同時に授業が始まる。.....(1点)
- ③ 予定の授業進度を守ることができる。.....(1点)

① 授業最初の発問が分かりやすく、活動しやすい。

授業の導入では、子供を最初から集中させ、興味をひかせることが大切である。最初だからこそ、どの子も、多少なりとも期待感をもって授業に臨んでいる。最初の段階で、子供の心をつかみ取るために、教師は最大限の配慮をする必要がある。最初から子供の興味を失ってしまうようなことになれば、その後の展開は難しいものになる。

② 無意図的で無駄な発問がない。

「無意図的で無駄な発問」は授業を冗長にする。「無駄な発問をして無駄なことを記憶に残す」ことのマイナスを避けるための指標である。下記の論文で言われていることもそれと関連する。

無意味なものを覚えて翌日に確認テストを行っても点数は下がるが、意味のあるものを覚えて翌日に確認テストを行うと点数は上がる（レミニセンス）。

(Matthew Hugh Erdelyi and jJeff (1978) 「Has Ebbinghaus Decayed with Time? The Growth of Recall over days」『Journal of Experimental Psychology』)

「意図的」であるとは、教師が構想をもっている授業の本筋から外れていないということである。「本筋」に沿って、授業は進められる。意図的で意味のある発問をするには、「発問」をノートに書き出し、いらぬ言葉はないか、別の短い言葉に言い換えることはできないか、吟味する方法がある。「発問」の言葉を短くすれば、子供にも伝わりやすい。「一字一句に至るまで考えぬく」作業が必要である。

③ 複数の発問が意図を持って組み立てられている。

45分間の一つの授業において、単一の「発問」のみで、授業が成立することはほとんどない。通常の授業は、補助発問も含め、複数の「発問」が組み合わせることによって成立する。それらの「発問」同士の関連性に焦点を当てているのが、本指標である。

『新教育学大事典』（第一法規）によれば、「発問」には、「論理的な組織化」が必要とされる。「前の発問と後の発問が、あるいは発問がその前後の教師の説明や指示とも矛盾しないこと。主要発問が論理必然的に出てくるようにそれ以前の説明や助言や指示や補助発問をその伏線として配置することを条件とする」とある。

複数の発問が行われる場合には、当然、教師側の「意図」をもった順序が存在する。その順序が、授業を受ける側である子供にとって、前後の矛盾なく、分かりやすいものでなければならない。そして、それぞれの「発問」が、子供の思考を徐々に深めていけるようなもの、さらに、意外な発見（「あれども見えず」のようなもの）を促すような「伏線」を含んでいるものであることが望ましい。

複数の発問を意図的に組み立てるには、授業全体の発問や指示を書き出すことが重要である。

2-2. 【指標2】明確で端的な作業指示

教師の言葉が長ければ長いほど、子供にとっては意味が分からなくなってくる。

例えば、「計算問題の5番まで終わったら、自分で丸付けをして、それから先生のところに見せに来なさい。間違えたところはやり直して、また持ってきて来なさい。全部できたら合格ですので、その後、読書をして待ちなさい。」のような指示は子供達に伝わらない。中には最後の「読書をして待ち

なさい」しか頭に残らず、本を取りに行つて、先生に叱られる子供がいる。これは、教師が悪い。人間がワーキングメモリ（短期記憶）で、記憶できる情報は限られている。特別支援教育ではもはや常識的なことになりつつあるが、そのようなことを知らないと、先ほどのような指示してしまうことになる。子供は、教師の指示を守ろうとしているのに、叱られてしまう。このようなことの繰り返しでは、教師と子供の信頼関係は作れない。反発する子供を生んでしまう。

「指示はどのように出せばいいのか」「指示の長さはどの程度がいいのか」ということを検討しておかなければならない。きわめて重要な指標である。

子供に行われる「指示」は、基本的に「一時に一事」が原則である。

脳科学者の池谷裕二は以下のように述べている。

二つの関係を同時に覚えるのではなく、一つひとつの段階を分けて覚えれば、学習効率が高まるのです。＜中略＞。いきなり高度なことに手を出すよりも、基礎を身につけてから少しずつ難易度を上げていったほうが、結果的には早く習得できるのです。

（池谷裕二（2009）『だれでも天才になれる 脳の仕組みと科学的勉強法』ライオン社）

「指示」する言葉は、「簡明」を原則とする。発達段階に応じて、難しい内容を簡単な言葉に言い換えることはもちろんのこと、必要最小限の「言葉数」にすることで、余計な情報を受け取らせないようにする。授業最初の「指示」を音声に録音するなどして、授業後に聞いてみるような研修が必要である。

① 指示が端的で短い。

指示が端的というのは、二つの要素が含まれている。

一つは教師の言葉遣いによる端的さであり、もう一つは内容の端的さである。

教師の言葉遣いによる端的さは、歯切れの良さやはっきりした語尾などがあげられる。小さくてもったりとした声は、子供でなくとも聞き取りにくい。教師の口調は、いわゆる「はきはきとした口調」にならなくてはならない。語尾がはっきりしていることも、端的さには欠かせない要素である。語尾がはっきりしない声は、最後がもやもやとした状態になり、極端な場合はほとんど聞き取れなくなっている。逆に、はきはきとした口調は、言葉にリズムを生み出しテンポを良くする。

内容の端的さとは、主語と述語がはっきりしていることである。「誰が」「何をするのか」を明確に指示することが必要である。

② 発問に作業指示を組み合わせて子供の活動を促している。

この項目は、「① 指示が端的で短い。」がクリアできていることを前提とする。

発問とは子供の思考・認識過程を経るものである。例えば「桃太郎は鬼退治に行ったのですか。」と問えば、答えは「はい」としか言いようがない。このように、子供が考える余地がないものは発問とは言えない。「桃太郎のお話を 20 文字で要約しなさい。」と問えば、子供の思考は違ったものになる。さらに、「ノートに書きなさい。」「分かる人は、手を挙げなさい。」「周りの人と相談しなさい。」などの作業指示を加えることで子供達の活動が促される。こうした作業指示が、発問とセットでなされているかが重要になる。

じっくり考えさせたい場合は、ノートに書かせなくてはならない。挙手等で答えを求めてしまう

と、いわゆる「できる子」を中心として学習が進んでしまう。ノートに書かせたうえで、発言を求めようとしても、自信のない子たちは固まってしまう。活発な意見を求めたい場合は、周りの子と答えを確かめ合わせる。このことによって、「自分の考えは正しいかもしれない。」と自信をもたせたり、「なるほど、そのような考えもあるか。」と新たな視点を得させたりすることもできる。

授業開始時に、学習内容の情報を全員が共有化するために挙手指名を多用したり、中心発問ではじっくり考えさせたりする。授業の終盤では、簡単な作業で授業時間を正確に守るなど、意図をもった作業指示であるかなども評価される。

③ 数種類の作業指示を使い分けている。

発問と作業指示は、必ずセットにするわけであるから、子供を動かす作業指示をたくさん持っていることが重要である。

次のような作業指示が教室では多く使われている。

- ノートに書きなさい。
- 手を挙げなさい。
- 周りの人と相談しなさい。
- できたら「できました」と言いなさい。
- 分かるところに線を引きなさい。
- 全員起立。考えが決まったら座りなさい。
- 教科書・資料集で調べなさい。
- 指で押さえなさい。
- 終わったら、教科書を読んでいなさい。

作業指示がいつでも同じようなパターンでは、マンネリ化した授業となってしまう。例えば下表のように、子供の状態を見て指示の種類を使い分けることも考えられる。

【子供の状態や発問の意図】	【使い分けたい作業指示】
子供が自分の答えに自信がない。	周りの人と相談しなさい。
じっくりと考えさせたい。	自分の考えをノートに書きなさい。
子供の状況を把握したい。	書き終わった人は見せに来なさい。
多様な発言を引き出したい。	黒板に自分の考えを書きなさい。
多様な意見に気付かせたい。	自分と違う意見を付け足しなさい。
低位の子に必ず意見をもたせたい。	最も良い意見をノートに書きなさい。

2-3. 【指標3】 あたたかな表情（笑顔）

『Immediacy in the Classroom: Research and Practical Implications』(Kelly A.Rocca (2007))によると、「Nonverbal Immediacy Behaviors」の中で、効果のある方法として「Smiling at students」、つまり子供に笑顔であることが示されている。笑顔で授業をすることは教師の基本的なスキルであり、授業の「前提条件」である。

看護師たちが笑顔で働くように努力している病院では、患者の治癒率が統計的に高いという（林

成之（2009）『脳に悪い七つの習慣』幻冬舎新書）。まして、教師は感受性豊かな子供を教えるプロなのだから、笑顔で授業をすることは基本的な技能であろう。

授業は出だしが肝心である。教師が笑顔で授業を始め、子供の発言をきちんと取り上げて授業をするならば、子供も安心して意見を発表し、活発な授業になっていくはずである。逆に、威圧的な表情で教師が授業を始めれば、子供は委縮し、重い雰囲気 of 授業になってしまうだろう。

① 授業の開始を笑顔で始めている。

「Embodied emotion modulates neural signature of performance monitoring」（Wiswede,D,Munte,TF,Kramer,UM,Russeler,J（2009）PLos One,4:e5754）によると、笑顔は、それを見る人だけでなく、笑顔を作る人にも、良い心理効果があるという。笑顔はドーパミン系の神経活動が変化するからだ。顔の筋肉を笑顔の状態にすると、それだけでドーパミンなどのホルモンが分泌されて、人は楽しさを感じるという。また、人の顔を見ると共感する能力をつかさどっている「ミラーニューロン」が無意識にそれを模倣する。つまり、「子供が見ている教師の表情が笑顔ならば、子供も自然と笑顔になる」のである。つまり「教師が笑顔で授業をすること」は、生徒にとっても教師にとっても良い心理効果がある。

当然のことであるが、授業の開始に笑顔になれなければ、次の項目である「②あたたかな笑顔を最後まで保持している。」ことも、「③場面に応じて表情を豊かに使い分けている。」こともできない。

世界的脳科学者の林成之は前掲書の中で「笑顔になると、脳のパフォーマンスが上がる」と述べている。子供が笑顔で学習できるようにすれば、学習効率が良くなるということである。

このように、教師の笑顔は、子供の学習にも大きな影響を与えるのである。

② あたたかな笑顔を最後まで保持している。

授業の開始だけならば、笑顔でいることはできるかもしれない。しかし、それを最後まで保持することは容易ではない。

なぜならば、授業は教師と子供とのやり取りのなかで成立していくものであり、毎回教師の意図する方向にばかり授業が進んでいくとは限らないからである。

時には、こちら側の考えの範疇にない意見を言ったり、行動をしたりすることもあるだろう。その際に、笑顔で「いいね！素晴らしい意見だ！」と返したり、その子の言動を否定せずに笑顔で授業を続けたりするには、教師の器の大きさとゆとり、そして瞬発的な対応力が必要になってくる。

授業が上手い、授業の名人と呼ばれる人は、笑顔で授業をすることはもちろん、子供へのあたたかな対応が抜群に優れているのである。

つまり、「あたたかな笑顔を最後まで保持している」という本項目を達成するためには、「あたたかな笑顔」と「あたたかな対応」の二つを満たしていなければならないのである。

子供へのあたたかな対応力は、すぐに身に付く技能ではない。笑顔と同様に、練習が必要である。

例えば、本指標に沿った教師の行為を細分化してチェックリストを作る方法がある。

- 笑顔で授業を開始している。
- 落ち着いた声で子供に話しかけている。
- ほめ言葉が多く、適切である。

- 間違っただ子供、失敗した子供への対応があたたかく適切である。
- 子供も教師も授業中に声を出して笑う場面がある。
- 笑顔で授業を終えている。

リストの項目は、自分で工夫して修正していけばよい。机の隅にリストを貼って、毎日見るようにすれば、本指標を意識して授業に臨むようになる。また、時には授業をビデオに録画し、授業のはじめ、中、終わりの映像だけを見ることで客観視することができる。

このように、毎日の授業で本指標を意識することはもちろん、その上でさらに模擬授業や研究授業などの緊張場面に何度も挑戦し、同僚などからコメントをもらうことで少しずつ技能を身に付けていくことが大切である。

③ 場面に応じて表情を豊かに使い分けている。

本指標は、「②あたたかな笑顔を最後まで保持している」をクリアして評定される。したがって、授業を笑顔で進められることをベースとして、さらに場面に応じて表情をバリエーション豊かに使い分ける技能を身に付けているかが問われる。

例えば、子供が素晴らしい意見を発表した場面で笑顔で子供を褒める。これは当然あり得るだろう。さらに「先生、びっくりした！すごくいい意見だね。」と、「驚いてから、褒める」という対応もある。驚くという表情を加えることによって、より強調して子供を褒めることができる。また、子供の発言や活動を見守る場面では、穏やかに「ほほ笑む」こともあれば、優しくうなずきながら「見つめる」こともあるだろう。

算数の時間に「ノートに式を書きなさい。」と指示したにも関わらず、全く作業をしない子がいたとする。このような場面で、声を荒立てて叱るのではなく、笑顔で「○○さん、式を書きます。」とその子の目を見つめながら穏やかに言えばよい。「目」「声のトーン」「口調」「口元」など、それぞれのパーツの組み合わせで幾通りもの表情を使い分けることができる。

2-4. 【指標4】適切な声の大きさとトーン

『Visible Learning』(John Hattie (2009))によると、「教師の言語の明瞭さと分かりやすさ」が学習者に与える効果は高い。「効果があったとされる数値」が 0.4 以上での数値であるのに対し、「教師の言語の明瞭さと分かりやすさ」が学習者に与える効果は、0.7 という値を示している。

第一声をはっきりと聞き取れたとき、子供は授業に集中することができる。逆に第一声が、はっきりと聞き取れなかったときは、「何と言われたのだろう。」と考えてしまうだろう。何を指示されているかが分からない場合、授業がつまらなくなり、子供は雑談を始める。何を言っているのか分からない授業を、最初は我慢して聞いていた子供も一ヶ月、二ヶ月とたつうちに我慢できなくなり騒ぎ出す。

子供が分かりやすいのは、明るく短い言葉ではっきりと話す教師だ。だからこそ、「教室全体に通る声はどのように出せばいいのか」「語尾がきちんと聞こえているか」ということを学び、検討しておかなければならない。適切な声の大きさとトーンは、授業力向上のために重要な指標である。

① 教室全体に通る声で授業をしている。

教室全体に通る声とは、単に大きな声で怒鳴るようなものではない。教室、体育館、運動場等、場に応じで自然な声量で全員の子供達に伝わる声である。

② 穏やかで温かい声のトーンで授業をしている。

技量の高い教師の口調は共通して穏やかである。穏やかな声とは、子供が聞いていて安定する声を指す。丁寧な言葉遣いも穏やかさにつながる。トーンが低すぎると暗くなる。トーンが高すぎると相手を疲れさせる。その教師の個性に応じた適切なトーンで授業ができることが大切である。

③語尾の一語まで明晰に発音している。

指示の言葉の語尾が消えてしまう人がある。日本語は、最後の言葉で意味が変わるため、指示の意味が伝わらない。何度言っても同じ語尾になることが基本である。語尾が異なれば、別の問題を出していることになる。

2-5. 【指標5】子供への目線（子供と目が合う）

教科書にばかり目線を落としながら説明をしている。黒板に向かったまま子供に背を向けて話している。目線が宙に浮いて子供と目が合わない。このように教師の目線が子供に向けられていないと、授業の緊張感が途切れ、学習に集中しない子供が多くなりがちである。目線を子供と合わせただけで授業に緊張感が生まれ、学習に集中できる子供が多くなる。このことは、多くの教師が経験則として理解している。

「子供への目線（子供と目が合う）」には二つの意味がある。

（1）子供が指示通りに動いているかを確認する。

教科書を開くように指示をした後、まだ開いていない子供がいるにもかかわらず、次の活動に移ってしまう授業がある。子供に目線を送らず、全体の確認ができていないために起きる事態である。そのまま放置すれば、教師の指示を聞かなくていいということを子供に誤学習させることにつながる。この状態が続くことで教師の指示が通らなくなる。

何か指示を出した後には必ず子供一人一人を見るようにする。指示通りに動いていない子供や、困っている子供、動きが遅い子供を見て取ることができれば、個別に対応できるのである。

（2）子供が授業に集中できるようにする。

授業中のおしゃべりで悩む教師は多い。その原因はいくつか考えられるが、一つはやはり子供への目線である。目線が下に落ちていたり、黒板に向かっていたりすると、子供に緊張感がなくなる。それが余計なおしゃべりを生むことになってしまう。時に手紙が回ったり、紙飛行機が飛んだりすることもある。

子供に目線が向いているかを常に確認しながら授業をすることが重要である。例えば板書をする際も、半身になって目線を子供に向けながら板書をするといよい。音読も同じである。教科書に目線を落とすのではなく、子供を見ながら読む必要がある。

① 全体へ話す際に、教室全体に視線を配り、一人一人に目を合わせている。

子供に視線を送っているつもりだが、子供は見られていると感じていない授業がある。これは、教師が子供と目を合わせていないから起こることである。

数秒で良いので一人一人と目を合わせることで、子供は「先生に見られている」と感じる。それが授業に緊張感を生むのである。

長時間目を合わせる必要はない。一人1、2秒で十分である。子供が見られていると感じればいいのだ。そのときも、大げさに首や顔を動かしキョロキョロする必要はない。目だけをゆつたりと動かすようにすると良い。

視線を合わせることで子供に安心感を与えることもできる。問題を解き終わった後、ふと顔をあげた時、目が合った教師がにっこりと笑ってくれたら、子供はうれしい気分になる。見られていることで安心して授業に取り組むことができるのである。

子供への視線を伸ばす方法として、山口県の小学校教師である河田孝文は以下の三つをあげている。

(1) 「一番後ろの右端と左端の人を見る」練習をする。

(2) 一人一人の子供の目を見る練習をする。

(3) こちらを向いていない子を見つける練習をする。

(河田孝文 (2006) 『授業の原理原則トークラインN o 55』 向山洋一教育実践原理原則研究会)

「一番後ろの右端と左端の人を見る」ことは、意識しないとできない。意図的に見ようとしなければ、中央や前方の生徒ばかり見てしまうのが通常である。見るようにトレーニングすることで見えるようになるのである。また、左端と右端のどちらかに苦手な方向がある教師も多い。苦手な方向をより強く意識してみる練習も必要だ。

教師の方を向かない子供を見つけることも、意図的に行いたい。授業中に手遊びをしていたり、音読で口だけを動かしていたりする子供を見落としてしまうことがある。視線を鍛えていけば、そのような見落としを防ぎ、全員をこちらに集中させられるようになる。

② 教師が教科書などを範読するような場合でも子供と視線を合わせようとしている。

教科書を範読する時に、いつ子供を見るのかが重要である。最初から最後まで教科書に視線が落ちていると、子供に緊張感がなくなり、次第に範読を聞かなくなる。誰が聞いていて、誰が聞いていないのかを確認するためにも、範読の際はなるべく顔を上げ、子供の状況を見取ることが大切である。

例えば国語の授業で範読をするとき、教科書本文の内容を覚えていれば、常に視線を子供に向けることができる。全文を暗記することは難しくとも、事前にすらすら読めるように練習しておき、教室では子供を見るように意識して範読を行う必要がある。

また、範読時だけでなく、子供が音読をする時も視線が重要である。子供に音読させながら、教師が手元の教科書を見ていることがあるが、それでは読んでいる子供と読んでいない子供の確認ができない。子供に読ませる際には、教師は顔を上げ、一人一人に視線を送って子供の活動状況を把握することが大切である。

③ 個別対応、児童の発言の際にも、全体に目配りをしている。

長々と一人に向かって説明したり、しゃがみこんで長い個別対応を続けると教室の雰囲気はだらける。一人の子供が発言する場面で、教師がその子だけを見ていると、話を聞いている子供と聞いていない子供を見分けることができない。

全体に説明する時、個別に対応する時、そして子供が発言している時。いかなる時にも全体に視線を向け、一人一人と目を合わせることが重要である。

子供にノートを持ってこさせる際にも、ノートを持ってきた子供本人を見つつ、全体にも視線を飛ばせるようにすると、問題に取り組んでいない子が誰なのか分かり、言葉をかけられるようになる。個別対応中も、個に話をしつつ、全体を見る。あるいは、全体が見える位置で個別指導をする。

また、子供が発言している時には、発言をしている子と視線を合わせつつ、全体にも目を向ける。

2-6. 【指標6】適切な立ち位置（発問時や個別対応時）

授業において、教師は基本的に子供の前に立つことになる。当然ながら適切な場所がある。

例えば、子供の顔が見える位置に立つと、「今、子供がどこを見ているか」がわかる。教師と目が合う子供は、話を集中して聞いているといえるだろう。ぼんやりと宙を見つめている子供は話を聞き逃してしまっているかもしれない。子供の状態を把握することで、指導を工夫することができる。資料を提示するときには、子供全員がそれを見られる位置に移動する。子供に作業をさせる時には、子供の間に入っていき、声をかけ、必要な指導をする。

教師は、教授行為によって意図的に立ち位置を変えるのである。

① 教卓の前だけに留まっていない。逆に動きすぎてもいない。

教師の立ち位置を決める基準となるのが教卓である。黒板の前に置かれることが多く、教材教具も置くことができるため、そこが基本的な立ち位置となりやすい。

しかし、教卓から一步も動かないと、子供一人一人の詳しい状況をつかむことが難しくなる。子供の顔を見ることはできても、ノートに何を書いているのかを把握することはできないだろう。

一方で、あちらこちらへと常に動き回っていると、子供も落ち着いて学習に取り組むことができなくなる。授業において活動をするのは子供である。教師の役割は活動の指示を出し、活動状況を見取り、指導や評価をすることである。子供の活動状況を見取る際には、近づくために動くことも必要だ。しかし、指示を出す際に教師が動いていたら、その動きが気になって話に集中できない子供が出てくるだろう。

② 大切な発問の時には体を止めて子供に向かっている。

大切な発問とは、その授業の目標を実現するために必要な思考及び活動を生み出す発問である。主発問とも言われ、授業に欠かせないものである。

教室には様々な子供がいる。発達障害の子供もいれば境界知能の子供もいる。そのような子供にとって、余分な情報は集中の妨げになってしまう。教師の動きも余分な情報となり得る。教師の必要以上の動きは子供の思考を混乱させる。全員にしっかり聞かせたい大切な発問の際には、教師は

体の動きを止め、子供に正対してから発問することが大切である。

全員と目を合わせられる位置に立ち、手に持っているものを置かせ、こちらを向かせる。

全員ができたことを確認して、初めて発問をする。

大切な発問をする際には、このように場を整えてから伝える配慮が必要である。

③ 場面に応じて子供の席に近づくなど適切な立ち位置をとっている。

集中が切れていた子供も、目線を合わせるだけで背筋を伸ばすことがある。一言も発しなくても、手振り身振りだけで伝わることもある。ふざけていた子供も、教師が近づくだけでおとなしくなることがある。教師の立ち振る舞いは、子供に様々な影響を与えるものである。

教師は集団を動かしつつ一人一人の状況を把握する。必要に応じて立ち位置を変えるのは、そのためである。集中が切れているなど感じれば、立ち位置を変え、その子供に近づく。すると緊張感が生まれ、集中力が戻ることもある。手が止まっている子供がいれば、近づいていって支援をすることもできる。動と静の使い分け。身につけておきたいスキルである。

近づくという行為一つをとっても意図的に行うべきなのである。

例えば、子供の集中が切れているときである。個人への対応だけでなく、「窓際の席が落ち着かない」というような、ある範囲に対しての対応も考えられる。

また、誰かが発表する時には、発表者から離れた位置にいる子供へと近づいていくとよい。発表する側より聞く側の方が集中を切らしやすい。離れた位置に移動することで、傍観者をなくすことができ、また、聞き方の指導もできる。

ただし、子供に近づいた分だけ、教師の視野は狭くなる。気になる子供の近くにばかりいては、全体の様子を把握できない。全体を見渡せる場所を基本の立ち位置とし、あとは臨機応変に近づき、離れる。そのような使い分けを行えるようになることが大切である。

2-7. 【指標 7】適切な動線（机間巡視時や個別対応時）

授業時、教師がどのように動くかも重要なテーマの一つである。適切に動くことができれば、子供一人一人に目を向け、それぞれが授業内容をどの程度理解しているのか、どのような考えを書いているのかなどを詳しく把握することができる。

一方、教師の動き方に偏りがあると、一部の子供にしか目が行き届かず、考えの把握はもちろんのこと、適切な支援を行うこともできなくなる。

子供の理解度を把握できていれば、その後の授業の進め方も変わる。誤っている子供がいることが分かれば、補助の説明を入れたり、演習問題を増やしたりするなどして解決の支援ができる。子供の状況を把握せずにいれば、理解できていない子を置きざりにして先に進むことにならざるを得ない。

技量の高い教師は全体に目が届くような机間指導を行っている。例えば算数の授業で、計算を間違えていた子供が何人いたか、その間違いはそれぞれどのようなものであったかが分かるということだ。そして、実際に人数や誤答内容などを具体的に説明できるということである。

それは、教師が、意図的計画的に机間指導を行い、一人一人の学習状況を正確に把握しているからである。常に全体を見ることができる動線を考え、意図的に動く必要がある。

① 教室で子供と教師が動きやすいように配慮している。

動線を考える際には、教室設計が欠かせない。教室のどこに何が配置してあるかによって、子供・教師の動きが変わるからだ。例えば、子供がよく使うものはどこに配置するのがよいのか。動くときに邪魔になるものはないか。よく声をかける子供の座席はどこに配置するのがよいかなど、すべて意図的に組み立てることで、授業中の動線にロジックが生まれる。

(1) 教室整備

教師や子供が動きやすい教室環境が必要である。

机の横に大きな荷物がかけてあったり、床にものが置かれたりしている状態では、教師や子供が動く際の邪魔になる。かばんや大きな荷物はロッカーにしまわせるなどの指導が必要である。

また、忘れ物をした際に貸し出す文具の置き場所、辞書の置き場所等も動線の邪魔にならないように工夫するとよい。授業中にものを借りに来る子供とノートを出しに来る子供がぶつからないように、教師の基本的な立ち位置とは反対の場所に置き場所を作っておくとよい。

(2) 座席の配慮

気になる子供（学力が低い子供、行動面や人間関係面で課題のある子供）の座席をどこかに置かにより、教師の動き方も変わる。彼らの座席を前の方にしておくと、教師の視線が行き届くと同時に、その子の様子を見る際に大きく動かずに済む。教師が必要以上に動き回ると無駄な時間が生まれ、子供も気が散って集中力が途切れることから、教師の動きは必要最低限で済むように、座席にも配慮するとよいだろう。

② 机間巡視の動線にロジックがあり公平な動きをしている。

授業中の机間指導にもロジックがある。ただ思いつきで動き、なんとなく見ているだけでは指導にならない。意図的に動き、その中で個別指導を行い、子供の理解状況を把握すべきである。

また、いつも同じ子供のところへ行くのも良いことではない。子供は、教師の動きをよく見ている。「いつも先生は〇〇くんのところへ行く」と子供が気づくと、「〇〇くんは勉強が分からないから、先生は〇〇くんに教えているんだな」と思う子供も出てくる。教室内を公平に巡りつつ、個々に声をかけながら、さりげなく個別指導を行うことが必要だ。そのためのロジックがあり、意図的な動線につながるのである。

(1) 個別指導の必要な子供への配慮

個別指導をしたい子供がいたとして、その子のところに直接行くのは良いことではない。全体をまわりながら、さりげなくその子のところに行き、後ろから声をかけて個別指導をし、短時間で離れるようにすると自然になる。

(2) 全体を見ることが出来る周り方

机間指導をする際には、全体へ目を配り、理解状況、作業の進捗状況を把握する必要がある。周り方を意識せずになんとか動いていると、一部の子供のみを見て、他の子供へは全く目が届かないという状況が生じる。全体を見ることが出来る周り方を数パターン持ち、状況に応じて使い分けられるとよい。

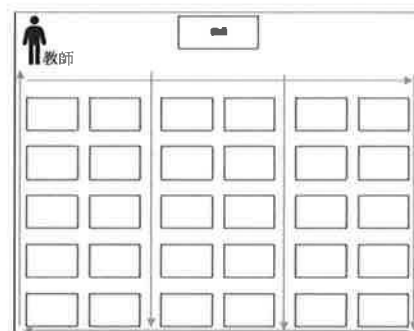
③ ノートを持ってこさせる時の子供の動きに配慮している。

授業中に子供が動く際に、どのように動くのかが決まっていると、子供の動きもがスムーズになる。動線が決まっておらず、バラバラに子供が動くと、授業の緊張感が途切れ、教室が騒がしくなる。集中力も低下し、授業内容の理解度も下がる。子供の動線もルールとして決めておくと、無駄がないゆえ教室の雰囲気が引き締まり、緊張感の保たれた授業になる。

(1) 一方通行にする

例えば算数の時間に問題が解けた子供からノートを持ってくるときには、一方通行にして、子供同士がぶつからないようにするとよい。子供同士がぶつかると、動きがスムーズでなくなるだけでなく、おしゃべりやケンカが始まるからだ。

右図のように、教師の立ち位置を決め、子供にも持ってくる時の道を指示しておけば、通路で子供同士がぶつかることがない。



(2) 椅子を入れさせる

子供がノートを持ってくるときには、椅子を入れるように指導をする場合もある。これは、他の子供が動くときに椅子が出ていると邪魔になるからだ。

2-8. 【指標8】授業の心地よいスピード感（空白、リズムやテンポ）

授業におけるリズムとテンポのある心地よいスピード感は、子供の集中力を高める。リズムのない授業やテンポの遅い授業では、とりわけ発達障害を持つ子供にとって苦痛になりやすい。やる事がなくなってしまう空白の時間があれば、子供は遊んでしまう。

例えば、次のような工夫を行うと、授業の中にスピード感を生むことができる。

- 1 変化のある繰り返し（説明せずに短時間で授業の中心に入る）
- 2 待たない（待たないから子供は時間を意識して追いつくようになる）
- 3 局面の限定（指導場面を限定することで子供が集中して思考する）
- 4 活動を重ねる（空白の時間を作らない）
- 5 流れるように（リズム）
- 6 区切れよく（テンポ）
- 7 適切な「作業指示」があること。
- 8 「前置き」をしない。
- 9 作業させたら「確認」し、個別に評定し、そして褒めること。
- 10 個人の作業、ペアやグループでの話し合いを組み合わせること。
- 11 列指名を多く、挙手指名を少なくすること。
- 12 子供に板書をさせ、次々に発表させること。

7の適切な「作業指示」とは、一方的にしゃべるのではなく、子供が小刻みに作業をしながら考えることができるように学習活動を仕組むことである。

8の「前置き」とは、導入で余計な前置きをしないこと、言葉を削り、確定しておくこと、適切な「作業指示」をすること等々である。

9の「確認」とは、させっぱなしではなく、誰が何をどれくらいできているのか教師が確かめる

ことである。

① 活動と活動を重ねるように指示をしている。

例えば左側から右側の列に順にテキストを配布していく際など、先にもらった子はすることがないので、空気が緩み、授業がだれてしまう。不要な空白の時間ができることにより、トラブルが発生することにつながる。「受け取った人は2ページ目を読みなさい」と作業指示を出しておいて、配布が終わったら全員で読ませるといった具合に、活動を重ねていくとよい。

また、「遅い子を待たない」という場面もある。例えば「答えをノートに書きなさい」と指示して、全員が書き終わるのを待たず、「書けた人、読んでください」「まだ書けてない人も今の意見を参考にして書いて」と活動を重ね、早い子に活動させながら遅い子にも追いつかせる。

しかし、それでも対応が必要な子がいる。この際、一人ずつ長い対応をするのではなく、短く何回も対応をしていくことで、全体の空白を作らず、かつ問題も起きにくい。どこでどのようなことが生じるか分からない。一人の子供にずっと時間を取っているということは、全体の指導に取って大きくマイナスになることがある。授業中の個別指導は「短く何回も」というような形でやって、「どんなことをしても完全に」というのは、特別の時間を作って指導するときにまわした方が多い。

② 作業を早く終えた後、10秒以上も待たされている子供がほとんどいない。

授業技量の高い教師は、一人一人の子供の活動に空白が生まれないように手立てを打って授業を組み立てている。子供の一人一人を机によんで指導するときがある。指導されるとよくわかり、すぐに課題が終えてしまうことがある。終わったから、何をしようかと思うと、何もすることがない。子供は「何をやっていいのか分からない」という状態になると、自然に手悪さや悪戯を始める。教師はそれを叱る。初めは静かになるが、次第に教室は騒然として収束がつかなくなってしまう。10秒以上も待たされている子供がほとんどいないようにするためには、「はやく終わった子」が取り組む課題を用意しておく必要がある。全体へ何をするのか指示を出し、然る後に個別に対応するという心を掛けなければならない。

③ どの子も集中して作業している。

授業の中で、教師の指示が長ければ長いほど、子供は作業に集中できなくなってしまう。指示を短く言って、短くやらせ、持って来させて褒める。

この繰り返しで子供は集中を保つ。

これらの流れをスムーズに行うためには、次のことが必要である。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1 教える内容をできるだけ細分化する。2 一時間に一回は全員のノートに丸をつける。3 作業が遅い子の時間差を埋めるための手だてをとる。 |
|---|

どうしても子供に長く活動させなければならない場面もある。その場合は少なくとも次の二つを明確にする。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1 どこまでできたら教師のところに持っていくのか。 |
|---|

2 全部終わったら何をするのか。

「〇番までできたら持って来なさい」という場合もあるし、「ノートに〇行書いたら持ってきなさい」という場合もあるだろう。

よく見られるのが、作業指示を出している途中で「じゃあ先生、〇〇はどうするんですか？」という子供の質問に、その都度教師が答えているという場面である。一見親切に見えるが、次々と質問が出て指示が通らなくなってしまう。「質問は最後に聞きます。」「話は最後まで聞きます。」のよ

うにきっぱりと言い切ることが必要である。

更に、子供が活動している途中で指示の修正・追加はしない。どうしても指示を追加する場合には、手に持っているものを置かせ、教師の方を向かせて集中して聞かせなければならない。場合によっては黒板に書く視覚支援が必要になるだろう。

2-9. 【指標 9】子供への対応（非言語的な対応を含む）

先述している通り、学習者が最も影響を受けるのは「教師」である。教師の接し方が子供の学習に最も影響をし、自己肯定感を高めることもあれば、傷つけてしまうこともある。若手教員が授業力を向上させるには、発問をし、指示を出した後の対応をどのようにするかが極めて重要である。

例えば、子供が授業の中で課題に取り組んできたときに、褒めたり驚いたりすることで、その子だけでなく、学級全体が活性化する。

① 授業中の褒め言葉が具体的で豊富である。

褒め言葉が、意識していなくても出てくるほどにならなければならない。そのためには、褒め言葉をノートに書き出し、何度も言って練習することが大切である。特別支援の必要な子の多くは、たくさんの挫折を経験していることが多い。挫折をたくさん経験するうちに、「やる気」がなくなっていく。教師はもっともっと褒める必要がある。褒め言葉の語彙を増やすという具体的な努力が必要である。

② 子供の予想外の発言にも「褒める」「切り返す」などの適切な言葉で対応できる。

子供の発想は豊かである。

授業中にこちらが考えていないことを発言することがある。そのような場合でも「褒める」ことを基本としながら切り返すのである。30 人の子供がいたら、30 通りの褒め言葉が、その場で出てくることが対応の基本である。

③ 授業中に不規則な発言・行動をする子への適切な対応ができる。

子供が不規則な発言・行動をするときには必ず何らかの理由がある。それを頭ごなしに叱るのではなく、その理由を明らかにし、対応方法をいくつも身に付けることが重要である。

例えば視線を送る。ジェスチャーだけで対応する。表情を変化させてみる。子供の言葉を繰り返す。短い言葉で対応する。このような数十種類の対応が、その場でできなければならない。その対応が「受容的」であること。授業の中での教師の対応は子供にとって、「受け入れてもらえた」というものでなければならない。

時には「そのようなことを言うものではありません」などと厳しい対応をすることもある。しかしそれはあくまで子供との信頼関係が前提にあつての上である。

また、子供によってはワーキングメモリが1つに集中し、一度に多くのことを理解できないことがある。「教科書25ページを開けて四角の三番をやりなさい」という指示を出すと、「先生、どこやるんですか?」と発言する子供がいる。一度に3つの指示が出ているため、記憶ができないのである。「教科書を出す」「25ページを開ける」「四角の三番をする」という3つの指示が入っているのだ。次のように「一時に一事」の指示をすることが大切である。

- 指示を区切って短く話す。
- 一度にやらせる作業を一つずつにする。
- 単純な表現をする。

2-10. 〔指標 10〕授業時間の遵守

授業が上手な教師は、授業の開始時間と終了時間を守る。逆に、授業が下手な教師は、授業時間を守らず、授業を長々と休み時間まで続ける。

授業時間を延ばす教師は、授業時間を延ばして学習をすることを、良いことをしていると錯覚している。しかし、多くの場合それらの行為は学習者に対してストレスであり、さらに教師が約束の時間を守らないことで、学級は荒れてしまう場合もある。

① 時間通りに授業が終わる。

授業が上手な人は、授業のリズムが良い。授業が心地よく流れていく。授業を受けていて、自然に引き込まれていき、いつのまにか子供は熱中している。

授業時間の延長はあってはならない。終了時刻を守ろうとするから「工夫」が必要となる。教える内容が明快になる。時間が延びる授業では工夫も生まれてこない。授業時間のオーバーは、授業の組み立て、すすめ方などにいろいろな問題があるために、結果として予定時間に収まらないのである。授業時間が延び、授業が休み時間に食い込むと、休み時間が減ってしまう。この時間は子供にとって「授業と同じように大切な時間」である。

45分でやろうとすれば、余分なことを省き、大切なことだけやろう、ここを重点的にやろう、そしてこのような展開でやろうと考えるようになる。

授業時間の枠を守り、その中で最大限の工夫をすることは「授業技量向上」の出発点である。

② 開始時刻と同時に授業が始まる。

チャイムと同時に授業を始めないのであれば、教師が自ら時間を守らなくてもいいと言っているのと同じである。

例えば、最初の1分間から子供に関心を持たせ、学習活動へ引きこむような導入が大切である。

若手教員でも授業の導入から子供が熱中できる方法として、一つに優れた教材教具を使う方法がある。フラッシュカードや音読教材、百玉そろばんや地図帳など、学習教材を使いどの子も活動を取り入れることで、子供は集中して授業に参加することができる。

③ 予定の授業進度を守ることができる。

授業進度が明らかに遅れているクラスがある。子供も親も心配し始める。遅れだしたからと子供の理解も考えずに、驚きのスピードで一気に進める。結果として子供達の理解は深まらない。

概ねカリキュラムに沿って、やや早めに進み、ゆとりをもって復習の時間がとれるようにすることが望ましい。

第3章 若手教員の授業力向上手法の研究

1. 基本的な授業力を検定するセミナーの実施

第2章で挙げたように、本研究では独自の「初歩的な授業スキル 測定指標」を作成した。セミナーを実施して模擬授業を教員が行い、評価指標を基に複数名の教員でその模擬授業に採点をした。

採点の方法としては、各項目とも①が優先される。①を満たした場合は②を、①②を満たした場合は③を加えて評定するとした。もし、①の採点が0点であれば、②、③は採点しない。また、曖昧さを出来る限り無くすよう、3点の項目における採点は3点か0点のみとし、1点や2点の点数はつけないこととした。

1-1. 教師力向上セミナーin 東京（東京都江東区教育委員会後援）

(1) 日時：2016年9月4日（日）

(2) 日程と授業一覧

10:20～10:45

模擬授業 初級編 5名（5分×5＝25分）

- 1 道徳「日本人に知られていない日本の偉人。台湾農業の父 八田與一」
- 2 英語「教科化に対応した英会話授業」
- 3 英語「英会話ディベート指導」
- 4 社会「プログラミング教育の見地から、これからの社会に求められる発想力を探る」
- 5 国語「挨拶言葉から考える日本語、日本人の特徴」

10:45～10:55

講師による授業の基礎基本講座

11:05～11:40

模擬授業 中級編 5名（7分×5＝35分）

- 1 国語「プログラミング作文教育の提案」
- 2 英語「外国人観光客と話せる日本人」を育てる「英語で話せる日本図鑑」のユースウェア化
- 3 総合「エビデンスプログラム開発」
- 4 道徳「先人からレジリエンスを学ぶ」

文部科学省 教師力向上事業 初歩的な授業スキル 測定指標

※各項目とも「1」が優先される。
「1」を満たした場合は「2」を加えて採点する。
「1」「2」を満たした場合は「3」を加えて採点する。

1. 授業準備が整っておりやすい環境	
1. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
2. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
3. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
2. 明確で適切な指導	
1. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
2. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
3. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
3. 適切な指導	
1. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
2. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
3. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
4. 適切な指導の状況とトーン	
1. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
2. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
3. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
5. 学びへの意欲（学びの意欲が強い）	
1. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
2. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
3. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
6. 適切な指導（適切な指導が強い）	
1. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
2. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
3. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
7. 適切な指導（適切な指導が強い）	
1. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
2. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
3. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
8. 適切な指導（適切な指導が強い）	
1. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
2. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
3. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
9. 学びへの意欲（学びの意欲が強い）	
1. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
2. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
3. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
10. 適切な指導	
1. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
2. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)
3. 授業開始の時刻が分かるように、活動しやすい。	(3点)

11:40～11:50

第4講座 講師による授業の組み立て講座

模擬授業は、初級編（5分）と中級編（7分）に分けて実施した。授業後に、講師から具体的なアドバイスが伝えられた。

（3）参加者のアンケートと解説

①参加者のアンケート

- 今回示された1～10を意識することで、日頃の授業が大きく変化すると感じました。
- 新しい試みとして、評価用ルーブリックでの授業評価が行われ、一般化していくことで、日本全国で教員の指導力向上が期待されると思いました。
- 各項目とも①が優先されるので、①が満たされないと、②、③が評価してもらえないのは授業者の課題が明確になり、改善の指標になるため、良いと思いました。
- 評価用ルーブリックはとてもわかりやすいし、実力が反映されるものだと思います。このような評価を校内研修等で生かしていきたいと思います。
- 「評価用ルーブリック」に驚きました。視写しました！！（項目が明確。一目でわかる。点数配分がわかりやすい。評定方法が斬新。・・・①を満たした場合にのみ、②、③を加点できる。）
→自分の授業の測定指標として使いたいです。学校でも例会でもやりたいです。
→“いつ誰がどこで採点しても一定の標準化ができる指標”で教員免許講習が変わると思います。いや、免許講習に取り入れてほしいです。現在の講習は、試験で知識を問うが、「教師力」の授業スキルについては一切触れません。このような評価&研修こそ教員免許講習に入れて欲しいです。
→初歩的授業スキルはこのようなことを言うのか！！実にわかりやすいです。
→例会で互いの模擬授業にコメントを言い合う場合、授業内容と授業スキルがごちゃごちゃになります。さらに「声をもっと大きく」「こちらだけ見ている」など、断片的な指摘になりやすいです。
- この10項目があれば、自分の授業も他の先生の授業も明確な視点で振り返りができ、「どこを」直せば良いかがすぐわかります。
→①が最重要であること、納得しました。ありがとうございました。
- 「評価用ルーブリック」の説明には衝撃を受けた。今回、日本で初めてであろう。でも、非常に客観的な指標だと思う。この評価指標が中央から都道府県、各市町村に広まって欲しい。若い人に燃えるだろうが、年配者は・・・？2020年を機に、また教育界は大きく動く気がした、今はその転換期である。
- 新しい観点で模擬授業を測る画期的なセミナーだったと思います。従来の授業技量検定と比べ、はっきりと指標がわかるという印象でした。
- 普段の授業を意識した測定指標となっており、すぐにでもやってみたいと思いました。

- 項目が①②③とついており、従業度が分かり、何からやっていいのかわかるという点もいいと感じた。項目についての説明をもう少しして欲しいと感じた。
- 刺激的な指標でよかった。文科省が出してくれると、学校でも取り組みやすい。特に時間がに守られていない実情がある。一つずつの項目がわかりやすい。
- 7の③ 公平な動き→意図的で公平な動きとした方がより良いと思った。やはり、公平というと、どこも同じように、というニュアンスが強くなるが動きだけで公平さは出ないと思う。遠くから指名するときもあるし、手のかかる子の近くにいることもあるので。
- 授業の基本を中心に当てた講座で、大切なことを学び直せてとても良かったです。教室でもう一度意識しなおしたいと思いました。今回のような指標が、各学校に広まっていくといいなあと思えました。是非学校でも紹介していきたいです。
- 厳しい！と思ったけれど、技能を高めるためには、それでいいのかとも思いました。自分も、普段それだけのことができているのかというと、全然できていないと思います。自分も、一度実際に受けてみる必要があると思えました。
- お話を聞いて、評価用ルーブリックのことが、少し理解しました。①を通過しないと、②③に進めないというのは、厳しいようだけれど、それほど、大切なことなのだとわかりました。まずは、①がクリアできるように、日々の授業の中で気をつけていかないといけないと、痛感しています。まずは、時間を守ること、笑顔で授業することから始めます
- 私は、指示が長くなってしまいます。15秒以内、忘れないように取り組んでいきます。褒め言葉も、もっと意識していかないと、ダメだなあと思えます。できていないことが山ほどあります。1つ1つクリアできるように努力していきます。
- 評定の項目を見て、毎日の授業を振り返る事ばかりでした。特に、「10. 授業時間の遵守」については、子供の身になって考えたり、年計のことを考えたりした上で、当たり前だけど、とても大切なことだと思えました。まず各項目の①を意識し、続いて、②③と意識を広げていきたいと思えます。サークルに初任、3年目の若い先生がいますので、この評定用紙を知らせて、授業づくりに役立てるように学んでいきたいと思えます。
- 評価用ルーブリックの内容は、普段の授業で気をつけなければいけないことを端的にわかりやすくまとめてあり、自分でも意識できると思いました。評価する方の研修も主観的にならないように必要だと思えました。(正しい評価をしていただき、今後に活かしたいので。)褒め言葉、笑顔など明日から意識していきたいです。
- 上手な方の授業を多数見ることができました。また、指導案に最先端の情報がありました。本を読み学び、地元で今から伝えていきます。評価項目では、授業時間が伸びれば、以降はすべて0点になるとありました。極めて明確な指標だと思えました。私の職場の中に必要かと思いました。
- 授業をされる先生方のレベルがとても高いと感じました。一切よどみがなく、一つの授業に対して真剣に向き合っているのだと思えました。
- 笑顔、対応、褒め言葉、それぞれがとても意識されていると思えました。しかし、評価項目についての話を聞き、またさらに高いレベルからの評価を教えてもらいました。授業力の高い先生から具体的な評価項目をもとに授業改善がなされるので、授業の力は向上するのだと実感し

ました。

- 初歩的ということでの項目は、とてもいいと感じました。そして、①が×だと、②③は見ない、という点でも、厳しいですが、それを乗り越えていくと自然と授業力が向上していると思われるのではないかと感じました。当然自分は、点数を取ることができないと思いましたが。また、項目の細かさも良かったです。(だからこそ、○だったら進むのは、機能的です。)
- 授業について講師の先生による解説があり、様々な授業行為について考え、学ぶことができました。谷先生が作成された評価が三段階になっているという点は「意識すべき点が明確になる」「技能が段階的に示されている。」という良さがあると思います。一般の先生方にとっても授業改善をする上で大変参考になるものであると考えます。是非現場に導入し、活用したいと思いました。
- 評価用ルーブリック、とても驚きました。項目ごとに整理されているのは検定と同じですが、最初の項目で点数が取れない場合は、後の得点が入らないという仕組みが、新鮮でした。授業がよどみなく流れているようであっても、「褒める場面」がなかったり、表情に「ちょっとな」という感じがあるだけでも、点数が大幅に変わってくるというのは、私たちにとって、授業行為の価値を改めて捉え直す指標になるのではないかと直感しました。素晴らしいセミナーを有難うございました。
- 「文科省 評価用ルーブリックの開発」の書類がすごかったです。この指標をもとに、現場で授業力向上のための明確な指標が示されると、すごいなあと思いました。①を点数をもらわないと②③の採点ができないシステム、厳しいシステムだけど、①がととてもとても重要だからだというコメントでなるほど、と思いました。現場やセミナーで取り入れることで、ぐんと教師の技量が上がると思います。それとともに、これを判定する人が技量が高くないと正しく判定できないので、それも求められるんだなあと思いました。自分流で通してやってきている現場の先生が、これから様々な子供に対応できる力をつけていくために全国に広まるといいなと思います。

②アンケートの解説

今回の参加者で多くの方が、評価用ルーブリックの指標がわかりやすいと書いている。1つ1つの項目が明確であり、判定結果もわかりやすいと答えている。何より、学校現場で活用したいという声が多かった。学校で行われている研究授業等での活用である。学校現場では、授業を見る視点がバラバラであり、検討会の話し合いも論点がずれてしまうことが多々ある。授業力向上という視点においても、今回の評価用ルーブリックは有効であると考えている参加者が多い。また、明確な評価項目であるため授業者がどの部分を修正していけば良いかがわかる。例えば、表情の部分の点数が低いのであれば、毎日鏡の前で笑顔の練習をしたり、授業のビデオを録画し自分でフィードバックしたりしながら授業技量を高める練習をすることができる。指標が明確であるからこそ、このような具体的な方法で練習することができ、授業力を向上させることができる。

しかし、一方で判定する審査ができる教師がいなければならないという問題もある。授業を見て代案を示し、授業者へコメントできる力量がなければ判定できない。今回のように授業技量の高い教師が審査をつとめるのであれば授業者に対して解説をすることができる。審査する教師の育成が

必須課題であることが明らかとなった。

（４）主な成果

多くの教師が今回の評価指標を元に授業に挑戦する機会を作る必要がある。また、普段の学級での授業でも同様の評価指標で点数をつけフィードバックすることにより、教師の授業力が高まっていくと考える。今回のようなセミナーでの研修も広めていく必要があるが、それとともに公的な場での研修でこのような明確な評価指標で授業を検討する場を広めていく必要もある。例えば、学校の校内研修の一環として模擬授業をしながら今回の評価指標を使って見る。他人の授業に対してコメントすることは簡単ではない。まして、褒めるのではなく批評するのは難しい。しかし、この評価指標を用いれば、お互いに客観的な意見を言い合える。

自身が活動しているサークル等で今回の指標を用いて授業を見せ合うこと。そして、自分の勤務校の校内研修や研究授業の授業を見る視点として、今回の評価指標を使って見る。多くの教師がこの評価指標を使って研修することで、効果も検証できると考える。授業技量という考え方は、なかなか学校現場では一般的ではない。授業が上手い、下手という風にお互いの授業は見ない。その先生の個性として扱われる。個性ではなく、授業技量を客観的に見ることができると期待する。

（５）参加者の様子（写真）





1-2. 教師力向上セミナーin 沖縄（後援多数）

（1）後援

沖縄県教育委員会 那覇市教育委員会 石垣市教育委員会 豊見城市教育委員会 沖縄市教育委員会 宜野湾市教育委員会 南城市教育委員会 名護市教育委員会 糸満市教育委員会 うるま市教育委員会 久米島町教育委員会 西原町教育委員会 南風原町教育委員会 竹富町教育委員会 与那国町教育委員会 与那原町教育委員会 本部町教育委員会 八重瀬町教育委員会 嘉手納町教育委員会 恩納村教育委員会 宜野座村教育委員会 北中城村教育委員会 多良間村教育委員会 渡嘉敷村教育委員会 伊江村教育委員会 東村教育委員会 国頭村教育委員会 座間味村教育委員会 中城村教育委員会 渡嘉敷村教育委員会 今帰仁村教育委員会

（2）日時：2016年11月20日（日）

（3）日程と授業一覧

初級模擬授業	3分・・・1名
	5分・・・6名
中級模擬授業	6分・・・2名
	7分・・・4名
上級模擬授業	10分・・・5名

【初級①受験者／授業時間3分】

- 1 英語「What's this? It's～」

【初級②受験者／模擬授業5分】

- 1 道徳「フレッド和田イサムの気概」
- 2 算数「小数の筆算」
- 3 社会「仁和寺にある法師」
- 4 国語「日本語の奥深さに気付く感じる言葉」
- 5 道徳「日本発祥のスポーツ 男子新体操」
- 6 総合「地域の発信基地郵便について指導！」

【中級受験者／授業時間6分】

- 1 社会「日本に誇りが持てる日本史教育」
- 2 図工「法隆寺五重塔」

【中級受験者／授業時間7分】

- 1 道徳「笑いで心の健康と、体の健康を保つ」
- 2 総合「平和と日本人の誇り」

3 音楽「T O S S 音楽システムで非認知能力を高める」

【上級受験者／授業時間 10 分】

- 1 総合「T O S S 型未来教育が日本を救う」
- 2 総合「日本の転換点を教育で支える」
- 3 総合「人工知能とシンギュラリティ」
- 4 社会「ソ連の千島列島侵攻と占守島の戦い」
- 5 総合「A I 社会に向けて、将来、生徒にとって必要な非認知能力」

短時間で模擬授業を分析することで、教師の技量を把握することができる。より高度の技量の教師から評価することで、自分の技量のどこが良くて、どこが良くないかを判断することができる。また、教師技量を今後高める上で、どのような練習をしたらよいのかという方向性が分かる。(教師の質向上の方向性を自分で自覚できる)。

模擬授業者が 18 名おられたので、初級の一部を別会場で実施して、並行的にセミナーを進めた。初級講師には、上級模擬授業者 2 名で行った。

講師の講座は次のように設けた。

○授業技量検定十段が語る「教師の授業力向上への道」

○授業技量検定五段が語る「私が授業力向上のためにやってきた日々の鍛錬」

○授業技量検定九段が語る「やんちゃ君の学力も向上させる！授業システム」

初級模擬授業者のあとに、講師からのコメントと、講師の実際の授業についての解説の講座を挿入した。より、参加者の学びが深いものとなるようにした。また、参加者の教師修業の今後の方向性をエピソードから学べるようにした。

(4) 参加者のアンケートと解説

①参加者のアンケート

- 授業のテンポの良さ、声の出し方（第一声）、目線等、基本的なことから、授業の組み立て、題材選び、伝え方まで、とても勉強になりました。私も少しずつ試したいと思います。(沖縄県小学校教諭)
- たくさんのすばらしい授業を受け、良い授業のイメージを持つことができました。授業をみるだけでなく、講師を持つことができました。授業をみるだけでなく、講師の先生方のコメントを聞き、見えないもの、知らない事、どう修正したら良いのか勉強になりました。D表は授業の基礎、C表以上は授業が上手いことが当たり前の世界なんだと思いました。伴先生の本をよむこと。早速、七冊を買いました。読書は苦手ですが、チャンスと思い、続けていきます。(群馬県小学校教諭)
- 研究授業をされた先生方の授業のつくり込みに驚かされました。又、各授業を評価された先生方の視点も大変参考になりました。何より、授業に対する熱意と研究と勉強を怠らず、もっと良い授業をもっと新しい内容を子供達にしたいという気持ちがすばらしいと思いました。僕も実践してみようと思います。(沖縄県高校教諭)

- A表の授業を見て、授業の組み立てや研究の深さを学ぶことができました。今回、自分がB表を受験することで、一番難しかったのが、指導案の書き方でした。A表の先生方の指導案を見て、研究の深さを学びました。沖縄に来てよかったと思いました。(長崎県小学校教諭)
- 授業面では、場数がまだまだだと痛感しました。他の先生方の授業では、最先端の「人工知能」がテーマのものをを見せていただきました。本を読んでいても分からなかったことが少し分かる・理解することができました。「新卒教師の十か条」を意識して、先月小学校実習を終えました。難しかったですが、大切な事だと思いました。今日改めて、大切だと感じました。現職の先生方に負けずに教師修業を行います。(岡山県学生)
- 授業を向上させるためには、授業を提案し、たたいてもらうことで大きく成長できることを改めて感じました。授業参観50回＝研究授業1回という言葉が印象に残っています。積極的に授業を提案し、授業力を向上させていきたいと思いました。教科経営や学級経営のコツ、技術みたいな話が有段者の先生達からたくさん聞きたいと思いました。(沖縄県中学校教諭)
- 授業を見ていただきました。太田先生から言っていた「授業を受けている子に、言葉をとどける」という言葉が、「そうか!!」ととても胸にひびきました。また、授業を見ていただけるようにがんばります。多くの先生方が、提案性のある、楽しい授業をされていたので、とても勉強になりました。どの授業・講座にも学びがありました。(大阪府小学校教諭)
- 授業をなさった先生方がとってもかっこ良かったです。校内の研究授業とはちがってバツバツと斬られていくのを分かっているながら参加していたからです。どの先生方の授業も無駄な発問や指示がなく、やるべきことが明確になるから、子供たちもきっと授業が分かりやすいんだろうと思いました。また、批評なされる先生方の教材研究の幅が広く深く、批評をする方も常に勉強しているからこそそのコメントだと思いました。ふだんの授業で無駄な指示・発問が多いと感じており、セミナーに参加しましたが、AIなどの新しい内容にもふれることができ、とてもぜいたくな内容でした。来週から自分の授業にも生かしていきます。(沖縄県小学校教諭)

②アンケートの解説

- (ア) 授業のテンポ、声、目線等の視点での授業の基礎基本を学んだ参加者が多かった。また、題材選びなど、何の授業をするのか、授業の上達に従って、より高度の内容(教材の深さ、問題提起)を求められることが分かったようだ。
- (イ) 模擬授業を通して、「よい授業のイメージ」を描くことができたようだ。よい授業をするには、「よい授業のイメージ」がないといけない。参加者にも伝わっていることが分かる。
- (ウ) 講師から「あれども見えず」というより上級の授業から、指摘されることで参加者に、キーになる授業向上の視点を学んだことが分かる。
- (エ) 一つの授業を作るのに、多読による教材の深さ、教材の視点を持ったようだ。たくさんの情報から、子供にとって必要な情報を選び出し、知的な楽しさを伝えるために、加工、編集し、発問で、思考させることを学んだ。
- (オ) 子供が知的欲求にかられる授業の組み立て方のポイントを学んだ。
- (カ) 指導案を書くことで、教材の深さと、「全体構造図」を作成して、単元での提案の仕方を学んだ。

(キ) 教師の前に立ち、忌憚のない批評をもらうことが最大の成長であることを模擬授業者は感じたようだ。

(ク) 模擬授業者の無駄な発問や指示がないこと、言葉を削ることが相手の耳にストンと入っていくことを学んだ。

(5) 主な成果

指標を用いることで、講師と参加者が授業の視点を共有し、ポイントをつかむことができた。教材の準備や授業の組立について学ぶだけでなく、授業のテンポや声、目線等基本的な技術の重要性を学んだ参加者が多く、短時間で授業の上達の指針を得ることができたようである。

模擬授業の利点は、短時間で「どこが良くて、どこが悪いのか」をはっきりさせられることだ。特に1時間の授業を見て検討をするのではなく、わずか3分～10分程度の授業を見て検討をするため、学校現場で忙しくても取り入れやすいと好評であった。

(6) 参加者の様子 (写真)



1-3. 教師力向上セミナーin 三重（三重県教育委員会後援）

（１）日時：2016 年 11 月 23 日（水）

（２）日程と授業者一覧

第１講座 11：30～12：20

（１）授業を成立させるための指標とは

（２）TOSS 授業技量検定 D 表検定模擬授業

模擬授業者公募２名

授業者①（愛知県）

授業者②（滋賀県）

「文部科学省教師力向上事業 初歩的な授業スキル測定指標」による評価を行った。

第２講座 13：30～14：15

授業力向上 授業のベーシックスキル７

教師の表情、教師の視線など、授業を成立させるための７つのベーシックスキルについて

第３講座 14：25～15：25

基礎学力の要は教科書の活用能力

①教科書を効果的に使った算数の授業の組み立て方

②社会科授業、教科書を使う時。教科書から発展させる時。

第４講座 15：35～16：00

これら必要とされる子供の力、教師の力

三重会場では、初めて自主的なセミナーに参加する教員や地元の教育学部の学生を中心に参加を呼びかけた。そのため、講座の目的を次のように設定した。

- ① どの教科の授業にも共通する基礎的な内容
- ② 授業を参観し、評価する際の観点を明確にする内容
- ③ 実際の教材を使った教材研究の演習
- ④ 新学習指導要領に向けて、これから必要とされる教師力

（３）参加者のアンケートと解説

①参加者のアンケート

- 今日の一番の学びは、「笑顔を見ると幸せな気持ちになる。笑顔をつくると、幸せな気分になる」です。授業をしながら、自分は絶えず笑顔であるだろうか、そんなことを考える一日でした。

また、教科書の扱い方を丁寧に教えていただけたので、即活かしていきたいです。評価用ルーブリックを意識します。

- 本日はありがとうございました。授業での指標で自分が意識してできている項目、できていない項目が分かりました。学校で授業を見ていただく際に、できていないところを重点的に見てもらいたいなと思いました。また、教科書を活用する講座では、単元を見通すことで一貫した指導をすることができると教わり、その通りだと思いました。算数の授業で、一単元でつくることがあまりなかったので、きちんと見通しを持って指導しようと反省しました。私は1つの授業をじっくり練って授業をすることが多かったのですが、さっと考え、実践する力も必要だなと思いました。
- TOSS 授業技量検定 D 表検定を実際に拝見し、教師の表情、視線、明確な発問指示、リズムとテンポ、対応の5つが、授業をしていく中で重要だということを知ることができ、とても勉強になった。また、その D 表検定を具体的に評価した観点表から、自分の授業を振り返ることができ、課題がたくさん見えた。そのため、その課題に今後取り組んでいくとともに、その観点表を今後も活用して日々の自分の授業を振り返り、改善していきたいと思った。教科書を使った授業の組み立て方では、自分が想像できなかった発問の仕方や、授業の組み立て方をたくさん発見することができ、今後、自分が授業をしていく中でぜひ取り入れていきたいと思った。「授業のベーシックスキル」は、どの観点より非常に重要であると感じたため、今後常にその観点を頭に掲げ、授業のスキルや教師としてのスキルを向上させていきたいと思った。
- 表情、視線、教科書の活用方法など、教師としての基礎的な技術の重要性を再確認することができました。より良い学級経営、授業づくりには必要不可欠な要素であり、特に若手の教員が身につけておくべきものであると感じました。今回学ばせていただいたことを勤務校にも還元していきたいと感じました。
- 学生であっても、現場に出た時に何が大切なのか、どんなことを意識して授業をしてくのか、とても分かりやすく、勉強になりました。
- D 表検定、初歩的な授業スキルの表を見直して、春までに自分の柱とするべき考え、態度を頭に入れておきたいと思います。表情、声、目線は、普段から気をつけ、周りからも言われることですが、今日、笑顔は人の治りを早くしたり、面白いという感情を引き出したりすると聞き、より一層意識したいと思いました。学生同士でも指摘し合えることですので、互いに評価し合おうと思います。
- シンギュラリティ、ベーシックインカムなど、初めて聞くものが多く、とても興味深かったです。どれもホスピタリティ、クリエイティビティ、マネジメントが大切であると納得できるもので、自分もその3つを覚えて身につけておきたいです。

②アンケートの解説

以上のアンケートは本講座のアンケートの中で典型的な内容のものである。アンケートの中から学校現場の研修や大学の講義における課題等を抽出した。

- ① 教態（教師の立ち振る舞い）についての研修が不足している。

- ② 授業の「雰囲気」をつくっているはずの教師の表情や視線について触れられないことがない。
- ③ 授業の基本である「教科書を使った教材研究」の方法を学ぶ機会がない。
- ④ 授業を参観する明確で具体的な観点が不足している。
- ⑤ 観点が明確でないため、参観した授業の中から有益な技能や課題を抽出することができない。
- ⑥ 勤務以外の研修の場に、主体的に参加すると学びが大きい。

本講座では、若手教師や学生の参加が目立った。若手教師にこそ必要な教師の立つ振る舞いや教科書を使った教材研究を学べる場所を、今後も設定する必要性があると感じた。

(4) 参加者の様子 (写真)



2. 評価の実例

それぞれのセミナーにおいて、各審査員が評価したものを次のように集計し、その得点を授業者に伝えるとともに、一人一人についての改善意見や代案の実演などをその場で実施した。

9月4日(東京) 受検者名【1-1T先生】		添削員			合計
		1 A	2 B	3 C	
1. 意図が明確で分かりやすい発問					
① 授業最初の発問が分かりやすく、活動しやすい。(3点)		3	3	3	9
② 無駄な発問(とりあえず発問)がない。(3点)		3	3	3	9
③ 発問が意図を持って組み立てられている。(3点)		0	0	3	3
小計		6	6	9	21
2. 明確で適切な指導指示					
① 指示が簡潔で短い。(15秒以内) (4点)		3	3	3	9
② 役種類の作業指示を使い分けている。		3	0	3	6
③ 発問と作業指示がセットになっている。		0	0	3	3
小計		6	3	9	18
3. あたかな文面(黒面)					
① 授業の開始を文面で始めている。(1点)		1	1	0	2
② あたかな文面を最後まで保持している。(1点)		1	0	0	1
③ 黒面に応じて文面を数か所に使い分けている。(1点)		0	0	0	0
小計		2	1	0	3
4. 適切な声の大きさやトーン					
① 教室全体に届く声で授業をしている。(1点)		1	1	1	3
② 穏やかで柔らかい声のトーンで授業をしている。(1点)		0	1	1	2
③ 語尾の一語まで明確に発音している。(1点)		0	1	1	2
小計		1	3	3	7
5. 子供への目線(子供と目が合う)					
① 子供が発言する時にはその子供を見ている。(1点)		1	1	1	3
② 一人の子供が発言している最中でも全体への目配りをしている。(1点)		1	0	0	1
③ 教師が教材表などを確認するような場合でも子供と目線を合わせようとしている。(1点)		0	0	0	0
小計		2	1	1	4
6. 適切な立ち位置(黒面時や黒板前時)					
① 教室の前だけに留まっていない。適に動きまわっている。(1点)		1	1	1	3
② 大切な発問の時には体を止めて子供に向かっている。(1点)		1	0	0	1
③ 黒面に応じて子供の版に近づくなど適切な立ち位置をとっている。(1点)		1	0	0	1
小計		3	1	1	5
7. 適切な動線(黒板監視時や個別対応時)					
① 教室で子供と教師が動きやすいように配慮している。(1点)		1	1	1	3
② ノートを持ってこさせる時の子供の動きに配慮している。(1点)		1	0	1	2
③ 黒板監視にロシアがあり公平な動きをしている。		1	0	0	1
小計		3	1	2	6
8. 授業の心地よいスピード感(空白、リズムやテンポ)					
① 活動と活動を合わせるように指示をしている。(1点)		1	1	1	3
② 作業を早く終えた後、10秒以上待たされている子供がいない。(1点)		1	1	1	3
③ どの子も集中して作業している。(1点)		0	1	1	2
小計		2	3	3	8
9. 子供への対応(非言語的に対応を含む)					
① 授業中の褒め言葉が具体的にできている。(1点)		0	1	0	1
② 授業開始黒面で観察している子への適切な対応ができる。(1点)		0	1	0	1
③ 授業中に不規則発言をする子への適切な対応ができる。(1点)		0	0	0	0
小計		0	2	0	2
10. 授業時間の遵守					
① 時間通りに授業が終わる。(1点)		1	0	1	2
② 開始時刻と同時に授業が始まる。(1点)		1	0	1	2
③ 予定の授業進度を守る。(1点)		1	0	1	2
小計		3	0	3	6
合計		28	21	31	80

[illegible]

3. Web サイトの作成

事業の成果を長く残し、批判をいただきながら修正し、よりよいものにしていくため、Web サイトを作成し公開した。

若手教員の授業力構成要素の抽出とその向上手法の研究

<http://toss.gr.jp/kyoushiryoku/>

文部科学省委託事業 総合的な教師力向上のための調査研究事業

若手教員の授業力構成要素の抽出とその向上手法の研究

事業内容

独自作成評価指標

セミナー

効果検証

お問い合わせ



授業スキルの「見える化」による教師力の向上



事業内容

授業スキルの向上に向けた
本調査研究の概要について
ご説明します。



独自作成評価指標

独自に作成した授業スキル
の評価指標について項目ご
とに解説します。



セミナー

東京、沖縄、三重で開催さ
れた授業スキル向上セミナ
ーについてご案内します。



効果検証

本評価指標に基づきトレー
ニングを受けた人の効果に
ついて検証します。

Web 上において、この事業の内容、作成した評価指標、実施したセミナーの様子、効果検証の結果等のすべてを公開している。

評価指標については PDF でダウンロード可能にし、それぞれの項目の技量を高めるための解説も加えた。セミナーについてはその様子を動画で視聴できるようにした。

子どもの発達科学研究所による効果検証も公開した。

第4章 アンケート調査による効果検証（子どもの発達科学研究所）

本事業ではアンケート調査を行い、指標の効果の検証を行なった。調査はセミナーの参加者へインターネットを用いて調査を行い、本事業のセミナー参加者と非参加者を対象として行った。

職場ストレス（精神衛生）の軽減、授業実践についての自己評価の向上に対する効果の検証を目的とし、『若手教員の授業力構成要素の抽出とその向上手法事業によるセミナー（以下、文部科学省教師力向上セミナー）』を受講した教師は、そうでない教師に比べて、授業に対するスキルが向上し、授業の遅延が少なくなる。また心理的ストレスが軽減される。」ことを仮説とし、調査の結果、この仮説が支持された。

以下の調査結果報告は（公社）子どもの発達科学研究所による。

=====

1 研究の目的

本研究は「文部科学省教師力向上セミナー」の参加者について、ストレスの軽減と、授業実践についての自己評価向上に対する効果の検証を目的とする。

仮説：「文部科学省教師力向上セミナー」を受講した教職員は、研修を受けていない教職員に比べて、ストレスが軽減される。また授業に対するスキルが向上し、授業の遅延が少なくなる。

2 研究の方法

2-1. 調査対象者

本研究は、①文部科学省教師力向上セミナー、②教員免許更新研修の2つの研修の両方、またはいずれかに参加した教職員と、どちらも参加していない教職員、合計 439 名を対象とする。研修に参加した教職員に対しては、本調査への参加を口頭、文書、メールで呼びかけ、参加に同意した者を対象とした。また、研修に参加していない教職員に対しては、教師向けウェブサイトの中で募集を行い、参加に同意した者を対象とした。

対象者の研修参加に関する内訳は以下の通りである。

教師力向上セミナーのみ参加：90 名（19.6%）

教員免許更新研修のみ参加：33 名（7.2%）

両方参加した：6 名（1.3%）

参加していない：330 名（71.9%）

調査対象者 459 名のうち男性が 260 名（59.2%）、女性が 179 名（40.8%）であった。平均年齢は 40.0 歳、教職平均経験年数は 15.4 年であった。所属する学校種の内訳は、小学校 74.0%、中学校 19.8%、高等学校 3.6%、特別支援学校 2.3%、その他 0.2%であった。参加研修ごとの性別、平均年齢、平均教職員歴を表 1 に示す。

表 1. 研修ごとの対象者の性別、年齢、教職員歴について

	教師力向上 セミナー	教員免許更 新研修	両方参加	参加なし	合計
人数	n = 90 (19.6%)	n = 33 (7.2%)	n = 6 (1.3%)	n = 330 (71.9%)	n = 439
男性の割合 (%)	62.2%	44.4%	57.9%	57.2%	59.2%
年齢 (才)	39.3	41.1	43.3	40.0	40.0
教職員歴 (年)	14.5	15.5	20.8	15.5	15.4

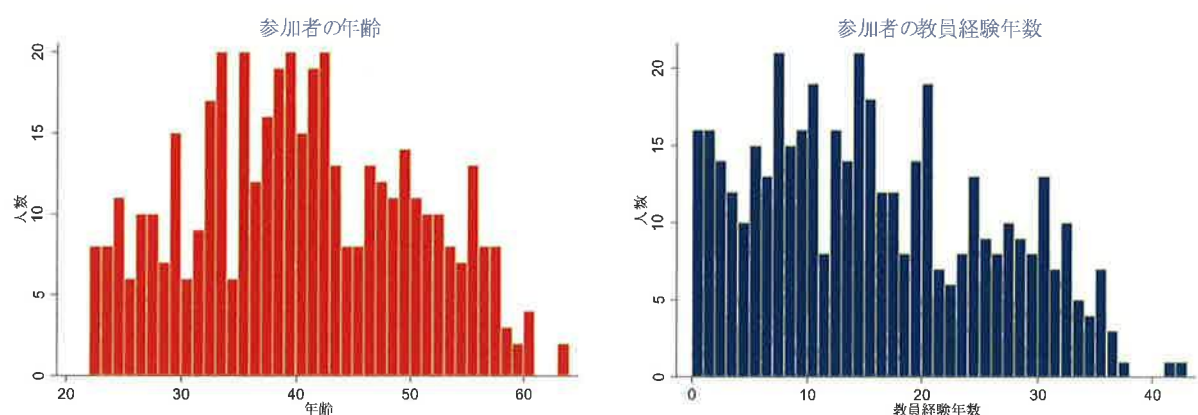


図 1. 対象者の年齢と教員経験年数の分布

2-2. 調査方法

質問項目に対する回答は、ネットリサーチシステムを使用し、対象者は無記名で質問に回答した。ただし、第1回と第2回の回答の突合のため、固有のID番号を使用した。

第1回の調査時期は研修参加前である2016年8月～11月、第2回は2つの研修終了後の2017年1月に行った。

2-3. 調査項目

調査項目については、下記のとおりである。

<ストレス評価について>

厚生労働省が作成した「職業性ストレス簡易調査票」を用いた。これは、職場で比較的簡便に使用できる57項目の自己記入式のストレス調査票であり、仕事のストレス要因（心理的な仕事の量的負担、心理的な仕事の質的負担、身体的負担、コントロール、技術の活用、対人関係、職場環境、仕事の適性度、働きがいの9尺度）、ストレス反応（ポジティブな心理的反応の尺度として活気、ネガティブな心理的反応の尺度としてイライラ感、疲労感、不安感、抑うつ感の5尺度）、修飾要因（上司、同僚、および配偶者・家族・友人からのサポート9項目および仕事あるいは家庭生活に対する満足度）の大きく3つから構成される。各項目に対する回答は4件法（1＝そうだ、2＝まあそうだ、3＝ややちがう、4＝ちがう）で、全項目の回答に要する時間は10分程度である。

<授業進度について>

各研修の受講者に対して、次のようなアンケート調査を実施した。回答は次の選択肢から得られた：1=いいえ、2=少しは変化があった、3=大いに変化があった、4=受けていないので評価できない。

授業進度への効果：セミナーの結果、授業進度等が早くなりましたか。

学んだことの実践化：新しく学んだことで、実際に教室で実践してみたことがありますか。

実践への貢献：新しく学んだことで、役にたったと実感できたものがありましたか。

授業のやり方の向上：学んだことにより、自分の授業のやり方がより良くなったと思いますか。

無について回答を求めた。

2-4. 解析方法

<ストレス評価について>

「職業性ストレス簡易調査票」の仕事のストレス要因、ストレス反応、修飾要因それぞれについて、1回目調査と2回目調査の得点差を求め、これをアウトカムとした。対象者は研修参加の有無によって4群（教師力向上セミナー群、教員免許更新研修群、両方参加群、参加なし群）に分けられ、参加なし群を基準として各群の効果を比較した。解析には重回帰分析を用い、参加者の性別、年齢、教職員歴を交絡因子として統制した。

<授業進度について>

各研修の参加者に対して行われたアンケートについては、集計結果を比較した。

3 結果

<ストレス評価について>

「職業性ストレス簡易調査票」の仕事のストレス要因、ストレス反応、修飾要因それぞれについて、各研修参加群の効果を比較した結果、仕事のストレス要因について、教師力向上セミナー群では研修参加なし群と比較してストレス得点が低くなる結果が得られた（表2；回帰係数・1.37、 $p = 0.02$ ）。また、修飾要因について、教師力向上セミナー群では研修参加なし群と比較してストレス得点が低くなる結果が得られた（表3；回帰係数・1.23、 $p = 0.02$ ）。ストレス反応については、研修参加の有意な効果はみられなかった。

表 2. 仕事のストレス要因に対する各研修群の効果

		回帰係数	p-value	[95% Conf.Interval]
研修群	教師力向上セミナー	-1.37	0.02	-2.55 to -0.20
	教員免許更新研修	-1.15	0.22	-2.98 to 0.68
	両方参加	-0.53	0.80	-4.55 to 3.50
性別（女性）		0.14	0.77	-0.81 to 1.09
年齢		-0.02	0.73	-0.16 to 0.11
教職員歴		-0.01	0.93	-0.14 to 0.13

表 3. 修飾要因に対する各研修群の効果

		回帰係数	p-value	[95% Conf.Interval]
研修群	教師力向上セミナー	-1.23	0.02	-2.25 to -0.21
	教員免許更新研修	0.09	0.91	-1.51 to 1.69
	両方参加	-2.43	0.18	-5.94 to 1.08
性別（女性）		0.72	0.09	-0.11 to 1.55
年齢		0.05	0.40	-0.07 to 0.17
教職員歴		-0.05	0.39	-0.17 to 0.07

<授業進度について>

教師力向上セミナーと教員免許更新研修それぞれを受講した後の「授業進度」、「実践したこと」、「役に立ったこと」、「授業のやり方の改善」それぞれの回答結果は表 4、図 2 の通りであった。教師力向上セミナー参加者の方が、免許更新研修参加者よりも、研修効果について高く評価する傾向がみられた。

表 4. 各研修に対するアンケート結果

授業進度	いいえ	少しは変化があった	大いに変化があった
教師力向上		31.8%	49.6%
免許更新講習		88.4%	8.7%
			18.6%
			2.9%
実践したこと	ない	実践したことがあった	実践したことを更に活かしている
教師力向上		8.8%	63.2%
免許更新講習		75.7%	21.4%
			28.0%
			2.9%
役に立ったこと	ない	少しはあった	かなりあった
教師力向上		2.4%	34.9%
免許更新講習		38.0%	56.3%
			62.7%
			5.6%
授業のやり方の改善	思わない	やや思う	とても思う
教師力向上		6.3%	56.7%
免許更新講習		80.9%	16.2%
			37.0%
			2.9%

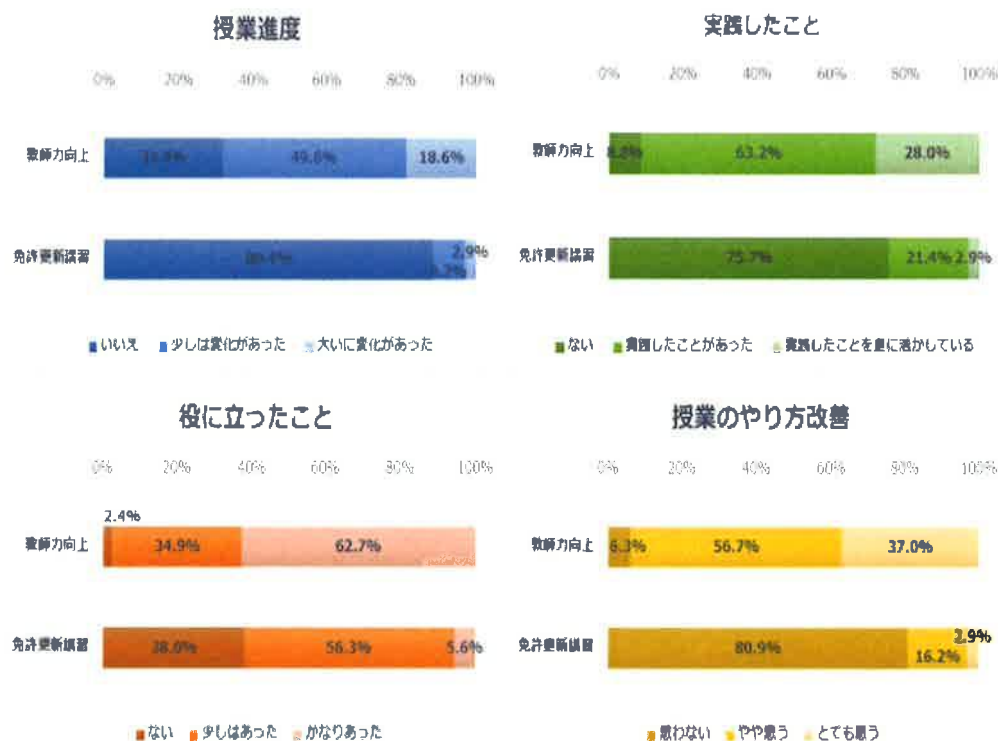


図2. 各研修に対するアンケート結果

4 考察

本研究の結果、「職業性ストレス簡易調査票」で測定される仕事のストレス要因と修飾要因に関して、文部科学省教師力向上セミナー受講の効果は統計学的に有意であると確認された。仕事のストレス要因に関する尺度は「非常にたくさんの仕事をしなければならない」「自分のペースで仕事ができる」「時間内に仕事が処理しきれない」「仕事の内容は自分にあっている」などの自分の仕事や職場に対する捉え方についての項目となっている。本セミナー受講者は、受講していない教職員と比較して、セミナー受講後に職場ストレスを軽減させたと考えられる。また修飾要因は、上司や同僚、家族などに対して「どのくらい気軽に話ができるか」「困った時、どのくらい頼りになるか」などの項目で、職場や家庭での人間関係の捉え方についての項目になっている。本セミナー受講者は、受講していない教職員と比較して、上司、同僚、家族等からのサポートおよび仕事や家庭生活に対する満足度を向上させることができたと考えられる。

研修を受けたことによる「授業進度」「実践したこと」「役に立ったこと」「授業のやり方の改善」への効果のいずれについても、「文部科学省教師力向上セミナー」の参加者は、免許更新講習の参加者より高い評価をしていた。「文部科学省教師力向上セミナー」の受講者の回答を詳しく見ると、91.2%が、「セミナーで新しく学んだことを実際に教室で実践してみた」と回答し、「少しはあった」「かなりあった」を合わせて97.6%が「役にたったと実感できたものがあった」と回答している。また、「やや思う」「とても思う」を合わせて93.7%が「自分の授業のやり方がより良くなった」と思うと回答している。更に、授業進度について、68.2%が「少し変化があった」「大いに変化があった」と回答している。これらの質問項目は回答者自身の実感であって、授業進度や事業内容の向上を客観的な指標を用いて評価し

たものではないが、これらの回答から、教師自身の本セミナーで学んだことを積極的に授業実践で生かし、その結果、自身の授業実践の質的向上や実際の授業進度への効果を実感していることが明らかとなった。これらは、教師自身の事業実践に関する自己効力感の向上に明確につながるであろう。

ストレス軽減に対する効果と、セミナーの効果についてのアンケート結果を合わせると、本講座の受講者について、以下のように推察することができる。

『受講者は、本セミナーで授業に生かすことができる実践的内容を学び、実際に授業においてそれを実践することができた。更に、授業実践内容の向上を実感し進度的にも順調に授業を進めることができた。その結果、研修前よりも、仕事や職場、また職場等の人間関係について肯定的な捉え方ができるようになり、職場ストレスが軽減した。』

(公益社団法人) 子どもの発達科学研究所

研究責任者：主席研究員 和久田学

解析責任者：上席研究員 西村倫子

研究補助・主任研究員 大須賀優子

=====

第5章 総括

本調査研究事業の研究主題は、「若手教員の授業力構成要素の抽出とその向上手法の研究」である。『Visible Learning』（John Hattie（2008））から学習効果へ最も影響を与えるのは教師であることから、教師の授業行為をもとに考えた。『Immediacy in the Classroom: Research and Practical Implications』（Kelly A.Rocca（2007））等を基に若手教員の授業力構成要素を10項目、さらにそれらに3項目ずつ補足をして抽出した。

1. 意図が明確で分かりやすい発問

- ① 授業最初の発問が分かりやすく、活動しやすい。
- ② 無意図的で無駄な発問がない。
- ③ 複数の発問が意図を持って組み立てられている。

2. 明確で端的な作業指示

- ① 指示が端的で短い。
- ② 発問に作業指示を組み合わせることで子供の活動を促している。
- ③ 数種類の作業指示を使い分けている。

3. あたたかな表情（笑顔）

- ① 授業の開始を笑顔で始めている。
- ② あたたかな笑顔を最後まで保持している。
- ③ 場面に応じて表情を豊かに使い分けている。

4. 適切な声の大きさとトーン

- ① 教室全体に通る声で授業をしている。
- ② 穏やかで温かい声のトーンで授業をしている。
- ③ 語尾の一語まで明晰に発音している。

5. 子供への目線（子供と目が合う）

- ① 全体へ話す際に、教室全体に目線を配り、一人一人に目を合わせている。
- ② 教師が教科書などを範読する場合でも子供と目線を合わせようとしている。
- ③ 個別対応、児童の発言の際にも、全体に目配りをしている。

6. 適切な立ち位置（発問時や個別対応時）

- ① 教卓の前だけに留まっていない。逆に動きすぎてもいない。
- ② 大切な発問の時には体を止めて子供に向かっている。
- ③ 場面に応じて子供の席に近づくなど適切な立ち位置をとっている。

7. 適切な動線（机間巡視時や個別対応時）

- ① 教室で子供と教師が動きやすいように配慮している。
- ② 机間巡視の動線にロジックがあり公平な動きをしている。
- ③ ノートを持ってこさせる時の子供の動きに配慮している。

8. 授業の心地よいスピード感（空白、リズムやテンポ）

- ① 活動と活動を重ねるように指示をしている。

② 作業を早く終えた後、10秒以上も待たされている子供がほとんどいない。

③ どの子も集中して作業している。

9. 子供への対応（非言語的な対応を含む）

① 授業中の褒め言葉が具体的で豊富である。

② 子供の予想外の発言にも「褒める」「切り返す」などの適切な言葉で対応できる。

③ 授業中に不規則な発言・行動をする子への適切な対応ができる。

10. 授業時間の遵守

① 時間通りに授業が終わる。

② 開始時刻と同時に授業が始まる。

③ 予定の授業進度を守ることができる。

そして、これらの技能の向上手法として、研修会（セミナー）を設け、参加者に模擬授業を行ってもらった。模擬授業を行なってもらうだけでなく、複数人の授業技量が高いとされる教師が採点をし、本人に結果をフィードバックした。そして授業力の検討をした。

言うまでもなく、本調査にも研究の限界が存在するが、できる限り交絡因子を排除し、研究者（子どもの発達科学研究所）に入ってもらい、客観的な測定を行なった。

その結果、以下のことが明らかになった。

『受講者は、本セミナーで授業に生かすことができる実践的内容を学び、実際に授業においてそれを実践することができた。さらに、授業実践内容の向上を実感し進度的にも順調に授業を進めることができるようになった。その結果、研修前よりも、仕事や職場、また職場等の人間関係について肯定的な捉え方ができるようになり、職場ストレスが軽減した。』

これらの効果があることが科学的に検証された。

※詳しくは前掲の「文部科学省教師力向上セミナーに関する効果検証」（子どもの発達科学研究所）を参照

しかし、職場ストレスが軽減したとしても、この授業力構成要素やテキストがどの教師にとっても効果的であるのかや、実際に授業力が上がるかを判断するには、まだまだデータの量も不足している。これらをさらに多くの教師に使ってもらい、さらに検討を重ねなければ、授業力の向上には結びつかないであろう。

今回抽出された項目を多くの方に広げ、全国各地で「基本的な授業力を検定するセミナー」を実施し検討を重ねていくことが今後必要である。

平成 28 年度

総合的な教師力向上のための調査研究事業 報告書

平成 29 年 3 月発行

編集・発行 特定非営利活動法人 TOSS

東京都品川区旗の台 2-4-12 TOSS ビル

TEL : 03-5702-5835

FAX : 03-5702-2384

様式第 10（無断複製等禁止の標示）

本報告書は、文部科学省の初等中等教育等振興事業委託費による委託事業として、特定非営利活動法人T O S Sが実施した平成28年度「総合的な教師力向上のため調査研究事業」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。